

大正五年度

回顧十五年

第三發展の機運

本日は本校が形を成して世に生まれましてから滿十五年の誕生記念日であります。本校が未だ形を成さぬ以前からこの計畫に同情を表され、終始一日の如く御盡力下された閣下及び諸君の斯く多數御來臨を得ましたことは、本校として深く感謝致す次第であります。

大正5年度
本校の成立は、今より十五年前即ち明治三十四年であります。その計畫に着手致したのは二十年前即ち日清戦争直後であります。而して其の後日露戦争當時に於て大擴張をなし今又世界戦亂に際して第三の發展を爲すべき機運に達して居るのであります。但し、本校の計畫と發展とがかく國家の大事と時勢の大飛躍とに相伴つて居るのは決して偶然の事ではない、文明進歩の秩序に於て深き關係を有してゐること、思ふのであります。それで私共はこの機運此の秩序に背く事なく益々發奮努力して、小にしては本校の發展充實、大にしては本邦女子教育の進歩、婦人界の向上の爲に盡すべき覺悟を致して居る次第であります。

何れの國に於ても女子教育を高めんとするに當つては非常な社會の迫害を受けたのでありまして、本邦に於ても亦同じ困難に遭遇致したのであります。併し比較的迅速なる進歩を遂げることが出来ました。これは一は時勢の影響もありませうが、主としては有力なる先輩諸氏が國家の前途を慮り、又社會の進歩、家庭の改善の根柢の何れにあるかを看破してこの事業を助けられたその先見の明と親切とに依るのであり、又婦人自身此處に覺醒して協力奮進せられた結果でありまして、我々當事者の感謝措く能はざるところであります。

殊に最も記憶せざるべからざる事は、皇室に於て加せられて本邦女子の向上進歩を望ませらるゝ餘り、本校に對して加へ給はつた厚き御眷顧であります。即ち故明治國母陛下よりは多額の金子を下賜せられ、大正國母陛下には嘗て皇太子妃殿下にて渡らせられし砌り本校に行啓あらせられ又内親王殿下、女王殿下の御方々の御來臨をも辱ふしたのであります。此の事は私共の光榮として感涙に咽ぶのは當然の事でありまして、併し獨り本校のみの私すべき光榮ではなくして、本邦婦人界に對する貴き御軫念の象徴として擧つて仰ぎまつり、一同心を併せて進歩向上に鞠躬盡瘁せねばならぬこと、思ふのであります。

更に又本日の記念式に於て忘るべからざること、本校内外

部に在つて教務事務に従事し、多年一日の如く献身的の努力を続けられた人々の貴き功勞であります。力の未だ不十分なる本校が斯くの如く本邦女子の最高修養機關としての任務を盡し來ることの出來たのは、實に之等の人々の賜といふの外はありませぬ。斯くの如き功勞に對しては今日の如き式日に際して何等か表彰の道を講ずるのが普通の事と思ひますが、併し謙つて考へまするに、凡そ此處に従事して居るものはその局面の大小其の年月の長短はありますが、其の精神覺悟に至つては皆同一であつて、其の間に軒輊を附することは出來ないのであります。

即ち本校の目的に於て一致協力して本邦婦人界に於ける人格的生命的の發現を計るといふ精神覺悟であります。それ故最も深き高き意義に於て功勞者を表彰し、之に報酬を贈るの途は、私共が此の精神覺悟に於て極力奮勵盡瘁して飽くまで目的を達することを謀り、出來るだけ早く本邦婦人の黄金世界を來らせる事ではないであらうか。實に精神的幸福に充ちて衷心歡喜に溢るゝ婦人界其のものゝ實現程貴重なる表彰、偉大な報酬はないであらうと思ふのであります。向一言すべきことは、本校の教育精神であります。本校に於ては最も高き信念、即ち一宗一派に偏せざる宗教的生命を養ふことを以て一切教育の歸着點と致して居ります。乏しき我々の力を以て此の目に見えぬ永久的基

礎を置くことを得たのは全くこの信念の前に總てがその一切の私我私慾を擲つて、献身的に一致協力したといふことに存すると考へる外はありませぬ。之は實に本校の生命でありまして今後益々之に力めなくてはならぬのは勿論であります。本校にして將來益々發展する必要がある、又實際發展するとすれば則ち此の根本の充實の爲であり、將來本校が若し不必要となり、又滅亡するやうなことがあるとすれば、則ち此の根本が枯れたが爲であると今から斷言するに何の躊躇をも要しませぬ。

最後に本日の式典を以て本校の第三發展の機運を表徴するかの如き、二つの新たな本校の發展運動について私は衷心の歡喜を以て満腔の感謝を捧げるのであります。發展運動とは即ち本校基金を二十五萬圓に満たすべく新たに十七萬圓の基金募集を致して居りますが、此の内既に本日迄に卒先してこの舉に贊助せられ寄附申込みをせられた金額が拾壹萬七千圓に達して居ります。今左に其の芳名を掲げますと、

- | | |
|------------|------------|
| 二五、〇〇〇、〇〇〇 | 男爵 澁澤 榮一君 |
| 一、〇〇〇、〇〇〇 | 服部 金太郎君 |
| 二五、〇〇〇、〇〇〇 | 男爵 森村市左衛門君 |
| 五、〇〇〇、〇〇〇 | 廣海 二三郎君 |
| 一〇、〇〇〇、〇〇〇 | 大倉 孫兵衛君 |

一〇、〇〇〇、〇〇〇	男爵 住友吉左衛門君
五、〇〇〇、〇〇〇	森村 勇君
三、〇〇〇、〇〇〇	山口 玄洞君
一〇、〇〇〇、〇〇〇	久原 文子君
五、〇〇〇、〇〇〇	竹原 友三郎君
三、〇〇〇、〇〇〇	村井 保固君
一、〇〇〇、〇〇〇	川崎 芳太郎君
三、〇〇〇、〇〇〇	新井 領一郎君
一、〇〇〇、〇〇〇	高木 又次郎君
一〇、〇〇〇、〇〇〇	古河 虎之助君
計 一一七、〇〇〇、〇〇〇	

此の合計と以前の基金を加へて二〇一萬餘圓となりますから、尙四萬計りの募集を要するわけであります。然るに之も未だ決定と言ふ迄には至りませぬが、數氏の御熱心なる御盡力に依つて多分遠からぬ中にこの目的額に達し得らるゝであらうといふ豫想が出来るのであります。

今一つの發展の表徴と申しますのは即ち本日をして起工式を擧ぐるところの（本校卒業生たる櫻楓會の企てに成つたる）御大典記念家政研究館の設立であります。この家政研究館設立の由來については既に御承知下さる方々もありませうが、これは

本校の卒業生たる櫻楓會員が昨秋曠古の御大典を擧げさせらるゝに際し、その記念館を母校に設立しようとして企てた卒業生の記念事業であります。

そこで櫻楓會では昨秋以來これが設立費募集に着手いたしまして、今日は既に最初の豫定募集額三萬圓を超過して居るやうな次第であります。この金は皆櫻楓會員並びにその關係者から集つたもので今その内譯を申しますと、

六二二、〇〇〇	櫻楓會補助團員諸氏
一、八〇六、六四〇	櫻楓會員諸氏
一〇二、三三九	若葉會員諸氏 (附屬高女卒業生)
二〇二、二五六	日本女子大學校在校生徒
六八八、八〇〇	一般(櫻楓會員の家庭關係者諸氏)
計 三、四二二、〇三五	

といふ非常なる好成绩であつて、これを見ても如何に本校の精神に熱心なる同情協力者のあるといふことを思うて感謝に堪へぬ次第であります。尙この擧に就いては獨り櫻楓會員の熱心ばかりでなく、本校評議員側に於ても大いに賛助協力せられて種々と御心配を煩はして居るのであります。といふのは今度のこの家政研究館の建築せらるゝ場所といふのは本校の諸種の建物而も木造ばかり多い所のその中央になつて居つて、萬一火事

とか地震とかいふやうな事のある場合にはこの建物は耐火耐震若しくはその遮断所とならなければならぬ位置であります。それ故これは是非とも煉瓦造りとして置かなければ折角の記念館を永久的のものとするのが出来ぬといふ心配でありまして、それには前の金額だけではどうしても不足するのであります。それで澁澤男爵及び森村男爵の御熱心なる御盡力で、どうかこの不足する所は本校の方で補うてもこれを立派に永久的のものにしたいといふ事に決りまして、今日斯うして起工式は挙げますが、この不足金に就いてはまだこれから御心配かなければならぬやうな次第であります。向この事については後程澁澤男爵が財務委員として詳細の御報告下さることになつて居りますから、私は今茲に櫻楓會員から贈られたこの記念館を受ける立場として禁ずることの出来ない感謝の意を表すことにのみ止めて置きます。

今や世界歴史上一大飛躍を畫すべき大事變の最中に於て、將來文明の進歩に對する本邦婦人の責任を思ひつゝ十五年記念式をあげ、以て最初の動機を顧み終局の目的を新たにすることは決して無意味なことではないと信じ、これを以て本日の式辭と致します。

〔家庭週報〕第三百六十四號 大正五年四月

當に改悔すべき時

現時の社會に對し私の不満足に思ふ點は先づ總ての方面に於て眞面目を缺いて居る事である。大きく云へば政治界に於ても政黨が不眞面目であり政府も亦眞面目でない。實業界に於ても多くの實業家が眞に産業を興し事業を經營するといふよりも、唯自分の利益を得んが爲めに色々の策を講じてゐる。一體に策略とか陰謀とか、皆陰かに隠れて、表面とは違つた小細工する傾きがあるが、此はつまり眞面目に働うとして本氣に事を爲んとする時は却つて邪魔にされて、怖い目に逢つたり、悪人と批評されたりするやうなふまじめな風が一般社會にあるから、従つてお互に眞に信用する事が出来ず總てに表を作ることになるのである。又一家の上から云つても夫婦親子の間でも眞に相互の了解が出来ないものが多いやうである。而して其原因はと云ふとやはり不眞面目といふことに歸着する。心と心を以て交ると云ふ所が缺けて居て唯表面を繕ふ事許りに勉めて居るからである。斯く生活が徹底しないのは眞面目を缺くといふことであり、又その結果になる事が多い。それで眞の自分の力を養ふとか、自分の人格を發展するとか、内面から價値を發揮すると

かと云ふやうな事が出来ぬから、従つて始終不安の状態に居り遂に元氣も沮喪し健康も衰へると云ふ有様に陥るのである。

尚私は今の社會に行はれてゐる多くの事柄は總て形式に傾いてゐると思ふ。知識にしても其内容は自ら生活し經驗して充實したものでなく、外形許りの事より外は解つて居ないのであるから、如何に教育を受け知識を求めても、眞に人生の眞價を齎味せずして、飢ゑ渴いて居るやうな荒んだ生活に陥つてゐるのである。之れは矢張り根本の信念、或は精神生活が缺けてゐるからである。而して此の缺陷を充すべき宗教界にも虚偽が多く、形式に流れて眞の生命を與へるやうな眞面目を缺いて居り、力を失ふて居るものが多いと思ふ。此様に孰れの方面を見ても眞面目を缺いて居る、之れが今日の通弊であらうと思ふ。此點に各自が氣がつき、自ら生活の空虚なるを知つて、眞摯眞劔の態度で眞の生活を開くと云ふ傾向に立ち戻らねば此の状態を救済する事は困難であらう。

要するに學問する人は眞の研究をすべく、宗教に携はる人は之れを實生活に行ふべく、政治家、教育者、實業家としても自分の態度を悔ひ改め自ら眞の生活を始めねばならぬ。實に今は懺悔の時代である。天より悔ひ改めよとの聲を聞き、眞に之れに従はねばならぬ時代であらうと思ふ。

(「新女界」第八卷第四號) 大正五年四月

婦人の天職

一、性の研究

特に婦人の職分使命といふことに就て考へる場合に、先づ研究しなければならぬことは男女關係の問題、兩性の相違、兩性の一致協同の問題である。即ち之等の關係を知らなければ婦人の問題、個人の使命も決めることが出来ないからである。されば、先づ人間の生を支配して居るところの兩性の原理法則の研究から初めねばならぬ。

宇宙にありとあらゆるもの、最も微細なる原子から又宇宙全體に亘る迄のすべてを通じて此の宇宙の本質は兩極になつて居る。その一極は男性であり他の一極は女性である。宇宙の理想といふものを一言に言へば即ち此の兩性の調和である。前に『宇宙は愛である』といふことを述べて置いたが、それはつまり此兩性が其理想に向つて進むところの活動らきである。

又『宇宙は生命である』といふその生命といふことも即ち此の兩性の活らく關係を言ふのである、例へば靈氣にも陰陽の二

つの流れがあり、磁石にも南北の兩極があるやうに、人間の精神の活らきにも男女兩性の本質を含んで居る、即ち宇宙のありとあらゆるものに此兩性があるのである。此の兩性の親和力が宇宙の凡てのものゝ力である。此の力といふは即ち愛である。愛は宇宙に新しき生命を生む力である。

又此の親和力のある半面には相反撥する力がある、即ち調和に進まんとする他の半面には必ずこれに反する力の活らきがある、これが性の兩極のある所以で又宇宙の本質そのものである。

此の性の兩極といふことは蓋に人間男女の別ではない、凡てのものゝ性の區別である。それ故一個人にも亦兩極の性を持つて居る、女にも男性的のところがあり男にも女性的のところがある。これあるがため男子が女子を解し女子が男子を解することも出来るのである。されば男女の別は全く相異なる兩極ではなくしてその個體に含む兩性の要素の差であるといふことになる。つまり男女の別をたゞ身體のことにのみ思ふのは間違ひである。靈に於てその本質の要素の差を持つて居るのであつて、身體はたゞその表徴である。此の兩極は常に理想的調和に向つて進まうとして居るといふことを前に述べたが、併しその理想實現といふことは容易に達し得ることではないのである。人生の

煩悶が其處に起るのである、これ即ち兩性の戦ひである。

古來男女の歴史を見ると、先づ相互に相引き相捉へようとして居る。ところがそれは理想的親和に至らずして力強き者は力弱き者を捉へて奴隸とし束縛を加へて居る。即ち自然に反き自由を束縛し人格を捕縛しようとする爲めに、相引き相愛する力は遂に相反し相惡むものとなり、親和は毀れて相離反するやうになつて来る。これは、一個人、一家庭に於けるばかりでなく、社會に於ても、國家に於てもこれと同じくその兩極關係が調和せぬ爲めに、人生にどれほど力の勞費をして居るかしのいのである。さうして男も女もたゞこの習慣の鎖に繋がれて愛に餓ゑ戦ひに疲れて居るのである。これが爲めに樂しかるべき人生は無味乾燥となり、人は終生眞の人生の意義を發見することが出来ないで終るものが多いのである。人間が此狀態を續けて居る内は實は何時迄も人間が根本的に生活の土臺の出來ぬ理であつて人生は煩悶に終るのである。

然らば先づ此煩悶を解決し戦ひに徹底して理想的調和を來すのにはどうしたらよいかを考へねばならぬ、若し然らざれば人は到底孤立孤獨となるの外はない。併し孤立は人生の理想ではない家族關係、友情關係、團體關係、男女關係の凡てに於て初めて眞の人生味があるからである。

一、女性の使命

されば如何にして調和するか、理想的の親和は如何にして来すかと言ふこと即ち此の必要に應じて此の目的を達するといふ事が女性の使命である。其處に婦人の天職があるのである。婦人が此の天職を全うすると言ふ事はとりもなほさず男女の兩極が理想的の調和を得て完全なる人生を造ると言ふ事に外ならないのである。元より兩極は相異なるものの表徴であるから、たとひそれが調和を得て完全に近づいたからとて、二つの同じ物が出来るのではない。二つの相異なるが故に調和の必要があるのであつて、又それが完全を追求する所以である。

それ故此の完全に向はんとする事が兩性の共通點であつて言ひ換ふれば、其の向上的精神を發達せしむると言ふ事は、男女共通であるのである。即ち人格の修養向上である。

此の人格の完全を期するには、女は女の缺點を補ひ、女は女の特性を發揮する事である。

そこで女の特性は比較的直觀的であるといふ事である。即ち愛、同情、調和、完全、統一、美と言ふ様な事は皆女子の特性である。

男子が凡てに於て比較的、分解的、歸納的であるのに對して

女子は比較的、建設的、演繹的である。

男子が比較的凡てに職業的であるのに比べて、女子は比較的凡てに精神的である。此の特性を特性として自由に發達せしむる様に修養する事が即ち女子の人格を養ふと言ふ事であつて、これは即ち一方にその長所とするものを養ひ、一方には其の缺點とする所即ち男子の長所とする所をも理解し且つ學ぶ事になるのである。つまり女は女として其の特長を發揮し而も今一步、男子の長所の學ぶべきを學ぶといふ事が婦人の人格完成の方法である。さうして又此の一つの目的を達する事が出来れば、同時に男女の關係を完全に出来るのである。これは即ち人間生活の凡ての土臺となつて國家をも社會をも改善する力となるものである。

茲に再言して置く事は、人間如何なる場合にも、自分一人孤獨で生活すると言ふ事は出来ない。

特性を發揮と言ふ事も他と比較しての特性發揮であつて如何なる場合にも決して他と關係なしに生きて行く事は出来ないものである。蓋し其の關係を最善なるものとなすか又常に戦ひに終らしむるかの二途である。

古い書の中にかう言ふ例へがある。

或る時樹木が集つてその樹木界に王を戴かうとした。そこ

で先づ橄欖の樹の處に行つて「汝われらの王となれよ」と言つた所が、橄欖の樹はそれに答へて言ふには「われいかで我が油を造ることを棄てて往て樹木の上に注ぐべけんや」と言つて、自分は其ういふ事に關係するより外に自分の爲すべき事があると言つて斷わつた。そこで又樹木は無花果樹に行つて「汝來りて我等の王となれよ」と言つた所が、無花果樹も亦「われいかで我が甜美とわが善き果を棄てて往きて樹々の上に注ぐべけんや」と言つて斷つて了つた。樹木は又葡萄の樹に「汝來りて我等の王となれよ」と言つた。葡萄の樹も亦前の二つの樹と同じく「われいかで神と人を悦ばしむるわが葡萄酒を造ることを棄てて往て樹木の上にそそぐべけんや」と言つた。そこで樹木は最後に荊に「汝來りて我等の王となれよ」と言つた所が荊は直に樹木に言ふには「汝等まことに枝を立て汝等の王となさば來りて我が庇蔭に依れ、然せずば荊より火出でてレバノの檜樹を焼きつくべし」と言つたと云ふ事である。

けれども世の多くの事實は、兎角自覺して立つべき人は其の公に報ずる事をさけて孤立する傾きがあり、淺薄なる野心家は時を得て其の利己心を逞ましうするのである。

さうしてはいつまでも理想に近づく事は出来ない。缺陷は益々缺陷に深くなり、完全は益々遠ざかつて行くのである。

適材を適所に於て其活動を自由にすると言ふ事は自分一個人の爲にも又全體の爲にも先づ自覺しなければならぬ事である。さうして此の關係を繋いで調和完全に近づけるものは協同、同情、理解、建設の力即ち兩性の中にもより多く女性に與へられた其の特性に依るものである。

三、男女の能率

婦人の迷信的偏見

何事にも習慣因襲から迷信と言ふものがある。婦人の能力と言ふ様な事については、尤も其の因襲的迷信が強い。『女子は智力に於て男子に劣つて居る。それはとても男子の様な働きは出来ない。又さういふ能力を呼び醒まさうとする事は所謂一知半解になつて、家の爲にも自己の爲にも不幸を招くものである。』と言ふ女子に對する偏見は昔からある所のものである。此の偏見は今日婦人が男子と同じく其の人格を養ひ、人として

同じ其の特性に發展せんとするに當つて、一難關となつて居るものである。故に先づ其の偏見を征服してかゝらなければならぬ。

所が昔からの女性の歴史に依つて作つた此の因襲的迷信はなかなか強い。成程婦人とても如上の如き弱點が少しもないとは言へない。けれども其の弱點を教育に依つて改める事は出来るのである。其の爲の人格修養であるのである。

然るにそれを修養しても逆も駄目であると信じて未だ其の結果をも見ぬうちに、自暴自棄して了ふのは即ち婦人が其の弱點に魅せられて、迷信的偏見に陥つて居るのである。

我が國では明治になつて新しい女と言ふものが出來た。それは彼の誤られた自然主義の副産物である。それは僅かに眼醒めかけた女子が其の淺慮を忘れて、徒らに自由を要求し、盲目的に自然主義を崇拜して従前の秩序を省みることもせず又自然の法則をも無視して、只其の誤れる自我の欲望のままに生活しようとする、所謂無計畫、無主義の人となつて了ふのである。

斯くの如き似而非新婦人ほど困つたものはないので、女性の缺點を缺點として省みないばかりでなく、其の人道の軌道をはづれた生活を以てそれが人間の本來要求して居る自然の生活であると自稱して世に高慢、我儘、個人主義の醜なる様を益々發

揮して居るのである。これを見ては誰でも彼の古聖人が、女子と小人は養ひ難しと歎じた事をまさに眞理であるとするの外はなくなるのである。爲に彼等が世の嘲笑を招くばかりでなく、同性の進歩を障害する事は夥しいのである。

叔斯様な結果になると言ふのも勿論女子自身の弱點から招く事には違ひないけれども、又従前の社會の因襲的偏見が、女子の教育を一定の型に箝めて了つて展びる力も展ばさない様に壓へつけて來た其の反動であると言ふ事は非むことの出來ない社會の罪である。

従前の因襲的教育が女子を男子に到底及ばぬものとし、これに自由を與へるのは嬰兒にメスを與へる様なものであるとした。さうして婦人に眞の自由を與へず眞の修養の方法を知らしめなかつたが爲の結果が茲に至つたのである。

此の社會的偏見は實に我が國の婦人にのみその影響を残したものである。西洋に於ても嘗ては是れに同じ偏見的時代もあつたのである。有名なる文豪(英)のセキスピアが書いたと言ふものゝ中にも、ペトルキヤといふ人が其の妻のマセリに對する態度を書いたものがある。それを見ると、

『私は私自身のものを支配する、さうして妻は私の家財であり動産である、妻は私の家であり私に便宜を與へる道具であ

る。私の牡牛であり私の驢馬であり私の凡てのものである』と云うて居る。それが三百年後の今日に至つては、歐米先進國の婦人に對する社會的態度といふものは大いに變つて來て居る。それは言ふ迄もなく婦人の人格を尊重し、婦人も男子も自由を共有して居るのである。それを見ると西洋各國に於ても、婦人は其の古い因襲的偏見を破るまでには夥多の努力を以て幾十年か奮闘した事であらうと言ふ事が想像されるのである。

將に其の歴史を見ると歐米婦人も亦、長き年月の間多くは其の覺醒せんとするものよりも、因襲的偏見を持つた主張者の方が常に勝利を博して居るのである。

けれども倦まず屈せず眞の自由を求め眞に精神の覺醒を爲し得た婦人が彼の國にはあつたので十九世紀の半頃となつて遂に因襲的偏見の強勢を以ても破る事の出来ない様な婦人の眞の力を表はし來た、そこで初めて強い決心をも識者の間に認められ、信ぜられる様になつたのである。此の事實は婦人自身をして又今迄の迷ひを醒まし、因襲的偏見を開く心強い導火線となつたものである。

是に比べると日本の婦人界は、婦人自身の努力の及ばぬ所もまだ遠いし又社會の形勢も歐米婦人界に比べて年限を以て言へば約まだ五十年も遅れて居ると言はねばならぬ。

前號に述べた婦人の迷信的偏見といふことに就いて日本のそれを今少しく述べなければならぬ。

彼のセキスピヤの書いた夫が妻に對する考へは我が國に於ては今日も尚、多くの男子の腦裡に往來して居るやうである。實に『どうしても妻は夫に對して絶対服従すべきものである』と云ふ事は日本の男子の多く信仰する所である。男子ばかりではない。女子も亦少數の外は矢張りこれを眞理の如くに信じて居る。中には相當の教育を受けて自ら覺醒し得たりと稱する婦人さへも未だ無意識的に此の思想の支配を免れないのである。彼等は一度他に嫁すれば自ら稱して自我を捨て、夫の保護のもとに生活する事であると考へて居る。それ故自我の主義自我の人格といふ様なものは結婚と同時に亡くなるのは必然の傾向として全然甘受して居る。殊に婦人が家庭以外に専門學の研究を續けるなどと言ふ事は到底其の努力の點に於ても續かず又續ける必要もないものゝ様に結婚生活の單なる物質の保護に甘んじて居る状態である。

さうしてそれ等の婦人は自ら眞理を發見したるが如く活然として曰く『自我實現とか、人格とか研究とかいふ様な事は學校生活時代の空想であつて、誠は世の中へ出て見ればさういふ夢は忽ちにして消えて了ふ。強ひてそれを續け様とすれば彼の所

謂新しい女と稱するものゝ如く慘めなる獨立生活をせねばならぬ様になつて来る。結婚生活はさういふ夢を見て居つた自分を逸早く醒し、而して自分を今日の安全なる生活に置いてくれた』と恰も悟るものゝ如く感謝喜悅に入つて居る。

結婚生活必ずしも人の進歩を停滞せしむるものではない。否それから大いに發展すべきものであるが、婦人の弱點は其の保護生活に甘んじ易い。而して僅かに眼醒めんとした過去の努力を裏切つて了ふ。斯くの如くにして少數の先進婦人も徹底する所迄得行かずして忽ちにして脆くも其の自我を折り意志を擲つてしまふ様な有様である。

成程結婚後婦人が其の意志の獨立を維持すると言ふ事は困難な事には相違ない。併し此の偏見的暗示を婦人自身が先づ破つて、此の壓迫の天地から自由を見出さなければ、婦人の覺醒する時機は何時來るであらうぞ。今日の日本婦人が其の人格を築かうとして努力しながらも、たゞ世の中の變るのを待つて居る様な態度では、社會の強い因襲的偏見に勝つべき時は、永久に來ないと言はねばならぬ。

物質的科學的偏見

此の外に尙今一つの障害は、物質科學的偏見である。一部の科學者は『婦人の智力は男子のそれに比べて著しく劣等であ

る。婦人の腦力が、根本的に低能に出來て居る』と證明を與へて居る。

今日科學萬能の世に於て、その科學上の證明を以て婦人の能力を否定するとなると、前に説く所の因襲的偏見よりも、其の根據は一層確かで一層有力なるものと言はねばならぬ。此の偏見の根據は、『腦の大小は智力に正比例するものである。さうして婦人の頭腦は男子の頭腦よりも小さく出來て居る』と言ふのである。此の推論は兎も角も、此の論の根據とする所の、腦の大小が智識に正比例するといふ學説は、今日の進んだ心理學解剖學の研究によつては段々に認められなくなつて來て居るのである。

即ち頭腦の大小は智力の活らきにのみ關係するものではない。其の證據としては寒帶人は溫帶人よりも腦が大きいと言ふ事實が見出されたのである。

此の研究に依ると歐洲で一番頭腦の大きいのはラブランド人(歐羅巴の最北)で、其次が瑞典那威人、それから獨逸、佛蘭西、伊太利と言ふ順序になつて居る。露西亞人と佛蘭西人とを比較して見ても、露西亞人の方が大きい比例になつて居る。

つまり腦の大小は氣候に關係する事が證據立てられたのであ

る。其の上に又文明の程度を見ると、頭腦の最も大きなラブランド人が、最も遅れて居ると言ふ事は従前の説に對する皮肉な證明である。

此の外には又古物學、人種學の研究は次の如き結果を發表して居る。

二千年前の人の頭腦と今日の人の頭腦とを比較して見ると、二千年前の人の頭腦の方が大きいと云ふ事と、又現在ニューヨーク市の進んで居る白人の頭と、建築に従事する工夫の黒奴の頭とを比べると、後者の方が大きい頭腦を有して居る。

是等も亦従前の科學の偏見を打破るべき重要な條件である。又人類學上から見た豪傑偉人の頭、平凡の人の頭、低腦者の頭とを比較して見ると、

彼のガンベッタの頭は一一五九瓦、ナポレオンの頭は一五〇二瓦あつたと言ふ事であるが、是は人類學者のグロークアの調査した黒奴の頭の平均重量よりも、ガンベッタ、ナポレオンの頭腦の方が軽いのである。又同じく人類學者のバイマンドの調べた世界最劣等の人種、亞弗利加のホツtentott人のそれよりも尠ない。

又現今世界中で名高い人類學者七名の調査になる體量と腦の重さの比較を見ると、

歐羅巴人の平均は三〇に對する一で、即ち體量が三十貫あるならば、腦の重さは一貫である。是を他の動物に比較して見ると、彼の鯨は——最も體と頭との差異の甚だしいものであるが——三千貫に對する一貫の割合である。

是を男女で比較して見ると、歐羅巴では男は一二八一瓦、女は一二三七瓦である。即ち女の頭の方が一四四瓦だけ尠ないのである。

併しこれは只腦と腦との重さを比較したもので、體との割合を比べて見ると、

英佛人に於ては、男子の脊の高さ一〇〇呎とすれば、女は九〇呎である。

この割合によると、男の腦は女のそれよりも、一オンス重いと云ふ事になるけれど體重との比較から見ると等差がないのである。

腦の大小に於ては以上の通りであるが、今一つ専門的研究となつて居るのは、彼の腦の前額（又は灰白質）の大きいものは智力が發達して居ると言ふ従前からの説である。

所が世界中で一番前額の大きいものは、鯨と象である。けれど其の大きさに比較して智力が優つては居らぬ。又彼の黒奴の腦と白人のそれよりも灰白質に富んで居ると言ふ事は事實であ

る。

そこで人の頭腦の價値は其の灰白質の多少、腦の大小に依つて定める事は出来ない。只其の實質がよく活動し所謂變化流動が盛んなものを以て、優良な頭腦とせねばならぬのではあるまいか。

然り以上の新證明は全く従前の頭の組織や分量や形状を見て、其の智力の鋭鈍を卜する所の證明を否定しつつかるのである。又全然それを否定しないとしても、婦人の腦の組織分量及び素質と云ふものが今日の解剖學、生物學、人類學の各研究の結果として、男子のそれ等に比し少しも大小差別がないと云ふ結論が下されて居るのである。

されば如上の科學的證明と言ふものも根據の危いものとなつて、今日ではそれが全然偏見と見做されて來たのである。

實力問題

唯此處に残つて居るものは事實上の力の問題である。歐米に於て、男子が女子よりも優つた能力を有して居るといふ説を堅く信じて居つたのは獨逸である。ところがその獨逸すら今日に於ては『智力に於ては男女の區別なし』といふ説に變つて來て居るのである。されば亞米利加、佛蘭西、伊太利、白耳義などと言ふ國々では、全然此の偏見がとれて來て、最近五十年間婦

人の能力を著しく認めて來て居ると同時に、婦人自身も實際に著しく進歩を示してゐるのである。

然るに悲しい事には、我が國では、まだ以上に述べた如き偏見が依然として勢力を持つて居て、婦人の實力の認めらるべきものがないと言ふ有様である。尤もこれは偏見の多い従前の日本の社會に育つた婦人には、無理のない事である。たゞ今後かの歐米婦人が先づ事實を以て證明して居るが如くに、日本婦人も亦事實の證明を擧げて、此の従前の偏見を破つて行くと云ふ強い確信を持つて貰ひ度い。さうして現代の婦人が自ら試み自ら實驗し自ら努力して行くうちにはやがて歐米の婦人と同じく、押しも押されもせぬ事實を産み出すべき時が來るであらうと言ふ事は、疑ひのない事である。

一九世紀の初めになつて彼のジョン、スチュアート、ミルは言つて居る。『男女は同じものである。けれども唯一つその人種の異なる如く：異なつて居る。此の外は今後も若しも女子に男子と同じ教育を與へたならば全く同じものになる』といふことを言つて居る。これが今日の歐米に於ける事實である。

そこで婦人は上述の二つの偏見即ち聖俗的偏見と科學的偏見を除くといふ事が進歩的婦人の信仰とならねばならぬ、さうして其自我の傾向、自我の興味、自我の深い要求に積極的態度を

持つといふ事が其研究的生活の土臺を作るのである。

四、婦人と研究

以上は『女性にも研究の可能性がある』といふことの客観的及び主観的假説を立てるに足る重要な條件である。尙此の外にも猶一層強い消極的潜在意識が今日の婦人の頭に残つて居てその決心を鈍らせて居るものがある。それは即ち古來聖賢の教訓及びその婦人に對して宣言した格言である。例へば東洋に於ては釋迦や孔子の如き偉大な聖人の訓言をもとゝしてその信仰者が婦人に對する教訓を組立ててそれを強い信仰として居るのである。西洋でも同じく哲學者のカント、シヨールペンハウエル、ソクラテス、プラトリーの如き學者先哲の格言は時代を隔てた後世まで金科玉條として残つて居る。

もとよりそれは價值ある言葉には違ひはない。けれども後世人はその言葉に囚はれて、偉人の教へた言外の眞意を汲み取る事が出来ない、況んや聖賢の言語と雖も時代を経て、事情を異にしては言ひ表はすべき言葉も異なるものがあつたであらう。けれども言葉に捕はれたる後世人は婦人をその言葉の範圍内に限つてしまつた、さうして孔子の所謂『女子と小人は養ひ難し』とし釋迦の訓への『女の罪障深し』として又はカント及び

シヨールペンハウエルなどの思想から來た『婦人は子供と大人の中間物』と言ふやうにいづれも凡ての婦人を未成品として取扱ひ、之を一括して侮辱の宣言を下して來た。試みにカントの婦人に對する説を抜萃して見ると

『凡て抽象的科學、論理學、哲學の如き者凡て無味乾燥なる智識は、如何に人生に有用なるものであつても、努力の堅實なる男子の手に委ねなければならぬ。此の故に女子が幾何學を研究するといふことはないであらう』と。

又『抽象的科學は子供や女には不可能である。子供と女とは抽象的學問には適しない、故に婦人の頭には、普遍的眞理に到達することは出来ない。未だ曾て女にして哲學や論理の如き問題を七分半の間考へ得るものに出會つたことがない。女は我々男子に缺けて居るところの性質を持つて居る、それは特殊的の智識と、さうして云ふ可からざるところの魅力である。併しながら論理又推理又思想を構成する、又智識の原理を結びつける所の思想と思想の間、原理と原理の關係を捕へる如きことは不可能である。たとひ最も天才であつて又最も高き能力を與へられて居る婦人であつても、平凡なる男子の達する高さに行き得る者は稀である』と言つて居る。即ち哲學論理學又修辭學等の如き凡て研究、發見の力の本は頭腦の活らきにあるので、

是が婦人には出来ないといふことを宣言して居るのである。此のカントは獨逸國に於てはその政權者として哲學者として最も崇拜された人であるが故にその所説がより多く重んぜられたのである。それが爲めに獨逸は女子の高等教育を認めた事も他の列強國の何れよりも遅かつた事は誰も知る所である。カントやシヨールベンハウエルの消極的婦人觀が凡てに積極的なる歐洲の而も列強第一の獨逸に於て斯くの如く信ぜられた事を見ても、それが一面の眞理であることは疑ひないのである。

然るに一方には又彼の文明の光の照り輝いたギリキ、ローマ又は近代文明のアングロサクソンの如き、その勃興の原因を見ると、必ずその根柢には婦人の頭腦、婦人の能力に華の咲いた時であることが證據立てられてゐる。又婦人の力の凋落した時には文明の華も亦凋落して居るといふ事實もある。此の事實を信じ、彼の偏見的思想に捕はれなかつたギリキやアングロサクソンの國々では早くより婦人自身が自由に進歩して居るのである。これがその國々の婦人が他の國の婦人に先だちて覺醒し婦人自ら其の境遇を拓いてその社會をして早く女子の價値を認めしむるやうになつた重大な原因であらう。左にそれらの國々に於て古來婦人にして男子と等しくその能力を發揮して學界に認められた模範研究的婦人の一二を擧げて見ようと思ふ。

五、文明に現はれたる婦人

(1) 希臘 ハイペイシャ (Hippatia)

文明に現はれたる婦人の例として、茲には先づギリキのハイペイシャを擧げる。

ハイペイシャは紀元四世紀末から五世紀の初めに互つて其の生涯を研究に捧げた一婦人である。ハイペイシャはアレキサンドリアに教授として、又著述家として又發明家として名聲高く、當時有髯男子をして辟易せしめたのである。のみならず十二世紀の初めに彼のニュートンが新發見の發表をするまで、彼の女を右に出るものはなかつたのである。

ハイペイシャは初め數學を其の父に學んだ。其後は別に大學にも行かずして、彼は遂に數學哲學に其の天才を發揮したのである。けれども彼は其の天才を以て所謂學者ぶると云ふ様な事はなかつた。即ち婦人としての禮義作法は、一つとして彼に實行の出來ぬものではなく、優美にして謙讓なるの淑徳は益々其の人格に光輝を添へた。

けれども學問上の事については常に、進取主義であつて其の態度は、實に宗教者が神に對するが如く、信ずるものゝ外には

たとひ如何なる者の前にも、一步も譲らなかつたのである。

これが爲不幸にして時の大僧正と競争するの止むなき場合となり、彼は遂に僧正に虐殺され、非業の最後を遂ぐるに至つたのである。此の時彼の多くの著書も悉く焼き捨てられたのであるが、それがために彼の學識、徳性は光輝を失ふことはなく當時の識者は皆彼の學徳に敬服して大いに其横死を歎じたのである。當時希臘のある詩人は次の如く彼を稱へた。

『偉大なるハイペイシヤよ御身は智慧の表徴であり、能辯の理想である。予は御身の言葉を聞く毎に又御身を見る毎に、げに崇拜の念を禁ずることが出来ない』

と。又監督のシニーシヤといふ人は嘗て、ハイペイシヤに就て學んだ人である、この人も

『ハイペイシヤに接してその聲を聞き、その人格に觸れる時に起る感じは即ち哲學の神聖なる神祕の眞理を握つて居る人といふの外はない』

と語つて居る。又或る人は

『ハイペイシヤに接すれば我が恩人、我が先生、我が姉、我が母といふ情を禁ずることが出来ない』

と敬慕して居る。

ハイペイシヤは實に斯の如き輿望を其の一身に集め古代文明

の華と咲いた人であつた。

今一人矢張り古い時代の人で例を求めて見ると、ギリースにアスペシヤスといふ婦人哲學者があつて、この人には彼のソクラテスでさへ非常に尊敬の念を以て接したといふことが當時の歴史に残つて居る。斯くの如き歴史を持つた歐米の婦人界に於ては、近世に至つては益々有爲の婦人を輩出し婦人の科學研究家さへ出て種々の發見をなし社會の改善に資したのもも尠なくない。彼のマダム、キユーリー（ラジウム原素の發見者で一九〇三年にノーベル賞金を受け現に佛蘭西大學の教授である）ミセス、ホーセツト（英國の大學教授）

マダム、セルマ、ラジャロフ（瑞西の著述家、一九〇九年ノーベル賞金を受く）

パロネス、バース、フォン、サトナ（ローマニヤの人でこれもノーベル賞金を受く）

等がある。これ等の人々は比較的専門科學の方であるが、近頃誰も知る女流教育家としては、ドクトル、モンテツソリーがある。女史は現在の人でもあり、且つその研究が一般の人々の興味を引くものであるから、左に少しくその研究的態度を紹介して見ようと思ふ。

(2) ドクトル、モンテツソリー (Dr. Montessori)

女史は伊太利の國に生れた。その研究力は世界の學界これを認めて居る。近頃亞米利加へ行つてその教育主義を宣傳して居るが、ハーバード大學教授のホルンス氏は女史を紹介して次の如く言つて居る。

『モンテツソリーの説は顯著にして刷新且つ重要なものである、その組織的、實行的方面に於ては慥かに獨創的なものである』

と稱へて居る。此のモンテツソリーが研究し、發明した原理に著しき價值があるといふのは女性の特徴が加はつて居るからである。即ち婦人獨特の同情、直觀の力がその社會的觀察に加はつて居ることである。而も科學的訓練をなし、集中した研究を爲したるもの故その蒐めたる研究材料は凡て女史の獨創的發見であつて恰かもベスタロツヂ、フレーベルの熱心及びその活らきに比較すべきものがある、否その教育界に貢獻したる婦人の創始的能力といふ點に於ては、ベスタロツヂ、フレーベル以上であるといふ事が出来るのである。女史は研究的態度といふことを語つて次の如く言つて居る。

『一體どういふ人を科學者といふことが出来るか』

物理學の研究室に入つてその器械を上手に使つて居る人であらうか、又化學の研究室に入つて試験管を上手に使つて上手に

試験をして居る人であらうか、又博物館の研究室に行つて多くの標本を集めて顯微鏡を見て居る人であらうか、決してそうではない。私共はどういふ人々に科學者の名を與へるのであるか。つまり此の實驗をするのは一つの手段であり一つの導きである。かの生命の深い眞理に生きる爲めに、及び私共を恍惚たらしむる程の祕密を知るために、其の祕密の前に掛つて居る幕を開くために——即ち眞理に行く道を開くために研究しつゝある人が眞の科學者である。道の爲めに盡すといふ事は、自然界にある所の神祕的祕密を自分の心の内に愛する熱情である。自分といふ考が遂に失くなつてしまふ迄に眞理を愛し慕ふ心それ丈の熱心、興味を以て自然を研究する人が眞の科學者である。

『科學者といふは決して巧みなる器械の取り扱ひ者ではない。彼は自然を崇拜して居る人である。恰かも或宗教信者が自分の神を拜む時に己れを忘れて禮拜して居る時のやうに、自然を崇拜し研究する者、即ちその表徴を通じて神を信する宗教者の如き生活を爲す者が眞の科學者である、又彼の簡易生活を送つて、その全力を仕ふるものゝ爲めに費し、よく沈黙を守り、たゞ祈に耽けるトラビストの態度の如き態度を以てその研究に集中する人こそ眞の科學者である』

と言つて居る。

以上は歐羅巴に於ける尊敬すべき研究的婦人の代表者を擧げたのであるが、茲に此の章の結論として今一言述べたいことは、即ち眞に研究せんとするものゝ爲めに最も大切なることは以上モンテツソリーも繰り返して言つて居る如く、精力の集中といふことである。

或る人々は研究といふことは智的方面のことであるから第一に才能がなくてはならないといふ。勿論才能も必要には違ひない。けれども淺慮に陥り易い人間の缺點は、才能が必要だと云へば、それにばかり興味を向けて、動もすれば才能そのものゝ爲めに、轉々と目的興味を變じて遂に何事にも成功を収めることが出来ないといふやうになり易いのである。世にいふ「何んでも出来る」といふことは本當は何んにも出来ない」といふ事になつてしまふものである。つまり才能にまかせて目前の興味に走り、才能驕つて一つのものを実着に守るといふことが出来ない、となるのである。それ故才能ある者に限つて集中力に乏しい、眞面目に一つのものに集中するといふことの出来ないものが多いのである。それは即ち根本的研究の態度に反するものであつて到底終極の目的を達する迄精力をつゞけることが出来ないのである。研究とは決して無味乾燥なるものではない。けれども又決して華かに人の興味を集め一躍して成功の峰に飛び登らし

むるものではない。所謂熱烈なる宗教信者が何ものも忘れて神に祈るが如く其の眞摯なる態度にほの見ゆる主觀的興味である。

即ち精力の集中である、言ひ換ふれば堅固なる信念である、信念がその凡てのものゝ根本となるのである。是は將來の婦人の生活に大關係のある重大な事である。

六、婦人の生活改善

今後の婦人生活上に必ず來るべき改善と云ふのは、即ち先づ婦人自身が従前のその如き一個人、一家庭に限られたる束縛を破つて其の人格を國家的に又社會的に擴大する事である。即ち従前の日本婦人に見るが如き徒らに男子に依り頼み、男子の保護をのみ俟つものではなく、寧ろ男子と協力し互ひに其の人格の長を助け短を補ひ、相互に伴侶とならねばならぬのである。

前々も述べた通り、宇宙の原則からして兩性の完全なる調和を以てその理想とするのであるから人間はその宇宙本體の單位である。若し男女の關係が不満足である場合には、忽ち其處に缺陷を來たすのである。個人にも又社會にも、病氣、煩悶、秩序紊亂といふ様な其の他あらゆる缺陷が生じ、人類は退歩を招

くの止むを得ないものとなる。

さればこの關係の調和不調和は個人及び社會國家の平和と不安と、幸福と不幸と、光明と暗黒の分岐點であるとも言へるのである。而も此の關係をして完全なる調和に近づかしむるものは男性的の、豪毅、果斷、分解、破壊の力に俟つよりも寧ろ女性の特徴たる同情、直觀、建設の力に俟つものが多いのである。されば婦人が其の特性を自覺し、其の理想に覺醒して其の責任を盡すといふことは取りも直さず此の關係を全うするといふことである。

即ち婦人が個人的にも家庭的にも今一步その人格を擴大して國家的に、又社會的に人として貢獻するを得るに至る其の最初の基點は先づ自己の人格を圓滿に修養しその家庭の圓滿を計る事にあるのであつて、それは同時に家庭の改善ともなり社會國家の進歩ともなるものである。

〔「家庭週報」第三百六十五、七十二號〕 大正五年五月六月

日本婦人の自覺

婦人の本務

從來婦人の本務と云へば、賢母良妻として家庭を治むる事を

行ればそれで十分であるとされて居つた、又其以外へ出る事は却て女徳を傷けると云ふやうな考であつた、換言すれば家庭に對する義務を盡せば女子の本分は完うせられたと云ふやうな考であつた、けれども今後は女子の本分は今少しく擴大せられて殆ど男子の職分と大差ない程度まで進み、寧ろ總ての範圍に於て女子も男子と共同せねばならぬ、又は國民としても男女共稼にならなければならぬとか、又男子の總ての活動の範圍に於て男子の補助とならなければならぬやうになつて來た、畢竟女子の天分を完うするには矢張女子も人間として、又國民として義務を盡し、權利を享有すべき時代になつて來た。

團體的組織的の仕事

殊に我國も歐洲戰、亂後は經濟も、政治も、道德も、社會精神生活の總てが國際的に轉換したる時代が來ると云ふ事は疑ふ餘地が無い、然らば女子が家を治め又國民として國家に盡さねばならぬ仕事も、今後の國民生活に適合するやうに發達しなければ、自己の運命を開拓する事も、又家庭を維持する事も、又國家の實力を増進すると云ふ事も出来ないやうになつて來る、而して今後は都會の婦人も、農村の婦人も、從來唯家の中にて個人的にして居つた仕事は、團體的、組織的に轉換しなければな

らぬ、例へば従來女子の仕事は、着物を縫ふとか、鶏を飼ふとか、畑を耕すとか云ふやうな箇々別々に各自、自分の仕事をして居ればそれで用が足りたのであるけれども、今日我國の經濟界は世界共通の競争場裡に立ち又さうなつて往かねばならぬやうになつて來たから、個人々々の活動の効力が他の文明國と匹敵するやうにならねば國家の維持も難かしく又一家の經濟も破綻を免かれない運命に陥るのである。

組織的活動の時代

今日は獨逸、亞米利加、英國等が實業に於て最も優勢を占めて居るのであるが、是等諸國の國民は男女殆ど皆組織的生活をなしつゝある、故に従來に於けるが如く、裁縫とか、料理とか、洗濯とか云ふやうなものは、皆家々にて婦人がなし來つたのであるけれども、今日は社會一般が分業制度になつて一切繻絆の洗濯までも大きな工場でやるやうになつたから、従來婦人が家々でなし來つた仕事は皆不必要になり、若し婦人がさう云ふ手仕事をするにも矢張工場へ往つて、全體の組織の一部となつて働かなければ、到底競争が出來ないやうになつて來た、斯の如く一家一村にて爲す小規模なる仕事と、大規模にて爲す仕事と競争する事は到底不可能になつて來た、此の自然の傾向に

よつて今日世界に優勢を占めて居る國に於ても、男子も女子も皆組織的活動をしなければならぬやうになつて來たのである。

歐米と我邦との比較

然るに我國は歐米諸國に比すれば是も後れて居る、今比例を以てすれば、組織的生活即ち分業になつてやつて居るのは、右に述べたる歐米諸國に於ては殆ど百分の九十を占めて居る、其餘る百分の十即ち一割だけが個人的に働らいて居る、之に比すれば日本は反比例にしたやうなもので、百分の八十までは眞に組織的生活になつて居らぬ、工業でも百分に足らぬやうなものである、然かし女が多い位である、而して經濟力がまだ餘程歐米に後れて居るので、従つて生産力が劣つて居る、他の部分も矢張個々別々にやつて居る、例へば婦人の仕事と云つても、繻物をするにも、洗濯をするにも、鶏を飼ふにも、絲を紡ぐにしても皆矢張個々別々の状態にあるから、内職が殆ど今の百分の中の六分を占め、婦人の經濟力を他の大多數の婦人の數と比較すれば能率は非常に低い、是等は少くとも英國に於ける工業發達の順序の如く組合組織にして團體的に生活し、分業的に活動するやうにしなれば効力が無いのである、此一事を以てするも何うしても我國の婦人たるものは、今少しく國民として將た

團體としての組織的生活が爲し得らるゝやうにならなければならぬ、又さう云ふ生活に適する教育を受けなければならぬ、然らざれば國民としての義務を盡す事が出来ない、而已ならず家庭として運命を支配する事が出来ぬやうになつて来る、日本の海外移民法が益々至難になるのは時勢に適しない遺方をするからであると思ふ。

家庭の改善

次に家庭を改善するには子供婦人を社會的に教育しなければならぬのであるが、之は是非婦人の力に俟たねばならぬ、今日歐米列強の婦人に見る處の働きを我國の婦人にも要求するやうになつて来た、而して社會的の活動をなすには社會衛生を根本的に改善しなければ家庭の健康を維持し上進する事を得ない、今其の例を擧ぐれば、我國に於ては肺結核とか、トラホームとか云ふやうな傳染病が著しく増進して、世界何れの國にも其の比を見ざる程のレコードを示して居る、斯の如き傳染病が漸次蔓延するにつれて、子供の健康が著しく劣悪になりそれより不幸な状態に陥る家庭が甚だ少なくない。之は唯自分の家庭だけに如何に衛生を勵行しても駄目である、今日は交通機關が完備して汽車があり、又學校に於て子供が共同生活をして居るので、

斯の如き場所に於て多く傳染する、それ故に社會的衛生を改善しなければ、子供の病氣を防止する事を得ない。

社會的衛生は婦人の任務

前に述べたる結核病又はトラホーム等を防止して總ての社會衛生を向上せしめんが爲めには歐米殊に亞米利加、英國に於ては婦人が主として其の任に當つて居る、俱樂部なりセッションなり婦人が團體的に一致して之を防止せるが爲め此の病魔を退治して居る、それが爲め肺結核などは餘程減少し、トラホームなどは殆ど無い、之があると云ふ事は國家の恥辱である、日本人が桑港等に入港する場合は、恰も野蠻人でも取扱ふ如く検査をされて居るのであるが、日本の如く社會衛生の届かぬ處であれば斯の如き待遇をされても已むを得ない事である、最近の徴兵検査の調査に依れば各府縣の統計を擧げてあるのであるが、最も多い間は千人に付五百人のトラホーム患者がある、之を徴兵やら子供やら工女其の他全體に平均すれば殆ど五分の一に達して居る、即ち五人の中に一人のトラホーム患者が居る譯である、實に恐るべき現象である、學校に就ては必ず級中に數名乃至十數名のトラホーム患者がある、東京の如き都會に於てすらさうであるから、況して衛生思想の發達せざる地方に於て

は尙更甚だしいだらうと思ふ、實に恐るべき趨勢になつて居る。

子供の病氣と母親の責任

此の點に付ては子供の時分より家庭に於て衛生思想を鼓吹せしめ、萬事清潔にする習慣を養成して消毒等が十分家庭に行はるゝやうになれば斯の如き病氣は全然撲滅する事が出来る、而して此等の病氣は重に子供に餘計傳染するものであるから、母親の責任も亦頗る重大なるものであると思ふ、それ故に若し我國の婦人も一の團體を組織して家庭の衛生を進め、又は社會衛生を改善するに十分の活動を爲す事を得るならば、斯の如き國民の荒廢を救ふ事を得るのである、此の國民の荒廢を救ひ家庭の健康を増進せんと欲するならば、何うしても國民をして組織的生活、即ち團體生活、共同生活をなし得らるゝやうにならなければならぬ、然らざれば到底其の目的を達する事を得ない、而して斯の如き生活をなさざれば、賢母良妻としての職務を完うする事を得ざるのみならず、國家に對して婦人の職分を完うする事を得ないであらう、之は唯一例を考へてもさうである、然るに今日までの日本婦人の生活は、姑く學校に居る時だけは組織的生活をして居るけれども、家庭に入れば全く個人的にな

つて了ふから、婦人の働きの効力は現はれないし、殊に國民として義務を盡すと云ふ事は殆ど出来ないと思つても好い位である、今後は我國の婦人も國民として其の義務を盡すべき自覺をなし、進んで其目的を達する爲めに組合若くは其他の團體生活を始めなければならぬと云ふ時代に到達したと信ずるのである。

（都會及び農村」第二卷第五號）大正五年五月

タゴール氏と語りて

タゴール氏の來遊は我々の思想生活に此の上なき刺戟と、そして又満足とを齎した。といふのは私は私の女子大學の教育主義として最も重きを置いて居る信念涵養の問題を研究するに就いて豫ねてタゴール氏の人格を欽仰し、一昨年來殊にこの信念涵養問題を中心にエマソン及びメーテルリンクと共にタゴールの著作物に就いても興味を以て研究して居た時であるから、今回タ翁の來朝は我々にとつて一層好機會を與へられたものとなつたのである。

さういふわけで私はタゴール氏の來遊を聞いて、是非違ひたものであると待ち望んで居た。東京に於ける第一回の講演を

帝國大學で聞いた後一兩回面談の結果、先日三田の慶應義塾で第二回の講演を聞く事となつた。この講演會後更に私の女子大學に招待して此所でも一場の講話を學生全體と共に聞くことが

出來たのは、最も深い意義のあることであつた。タゴール氏をわざ／＼此所に招待した理由は決して新しきを追ふわけではない。又その名が東洋唯一のノーベル賞金受領者といふので世界にもてはやされるやうになつたが爲ではない。前にもいふ通りタゴール氏も亦現代精神の一代代表人物であつて、其の著作物を通じて交通する氏の人格には我等も亦共鳴する處のものを見出すからである。それで學生にも是非直接にその人格に接觸させたい、さうして今一つ深い瞑想の境域に共に入りたいといふ希望があつたのである。タ翁も亦それだけのインサイトを持つた人であらうことを期待して居た。併し果してどういふ風にこの學校を見、どういふ風に感じられるかといふことは其の當座まで想像にまかせるの外はなかつた。實は私はタゴール氏が此處へ來られるまであまり胸襟をひらいて話すといふやうな機會はなかつたのである。殊に世間では比較的氏と親交のある人々の話として傳へるものゝ中にも氏を評して一様に沈黙詩人であつて人と交際するなどのことは好まないといふことに一致して居た。それはタゴール氏自身にも屢々聞く所であるが、併し今度

親しく氏の態度に接し其の意見を聞く所に依ると、私は今迄世間の評判とは大分違つた方面のタゴール氏を観ることが出來た。

私の學校へ來校の際は勿論講演を願ふ約束も何もなく、只親しく氏に接する機會を與へられたいといふ希望だけ申入れてあつたのであるが、來校の上歡んで生徒にも面接し其の著作のギタンジャリーの一節をも朗讀して聞かせられた上に、當日隨行のピヤスン氏の勧めに依つて自作の詩をベンガル語で謳はれた。あとで聞くと今迄幾度もさういふ希望はあつたのであるが、ついで受け入れられなかつたのであるといふことである。ピヤスン氏は尙其の時のタ翁の態度を評して、『實にあの時の會は不思議な力があつた。あの講堂は恰も聖者を得た寺院のやうであつた』と、タ翁もそれを聞いて靜かにうなづいて居られた。併し此の時もまたタ翁はあまりその感情を顔に表すといふこともなく、多く黙して歸られたのであるが、其の後私はタ翁を訪れた時初めてその衷心の意見を聞き、こちらの考をも話して幾度か感情の高潮に達したことを感じた。タゴール氏は帝大や三田で講演せられたやうに、三千年の歴史を持つた東洋に於て、戦後世界の文明に捧げる使命があることを信じて居る。その意味は物質萬能主義や、形式教育は遂に亡びて眼に見えぬ同

盟の出来る國々に依つて世界を一改革することを信じて居るのである。世間の人々はこの夕翁の言葉を誤解して、或は退嬰主義であるとか、直觀詩人であるとか評するけれども、それは一部の觀察に過ぎないものである。

タゴール氏は多くの言葉を以て多くの發表をすることを好まないのは事實である。けれどもその瞑想に入るものは當代世界のこと及び今後の計畫、宇宙といふことを感じて居る。又一方には極めて行き渡つた觀察眼を以て見て居られることがその談話の端々にも伺はれる。夕翁は自國の女子教育といふことについて、非常な熱心を以て考察して居られる。さうして歐洲戦後に於ける東洋婦人に就いても期待する處が多いやうである。夕翁と語る内には『印度の女子教育はまだ日本のそれに及ばないから日本の覺醒した婦人はこれを導いて是非とも東洋の爲に立つて貰はなければならぬ』といふやうなことも屢々混つた。

タゴールの宗教はブラマの系統である。けれども其の到達する所は各宗教の大なる調和、極致の歸一を理想として居る。夕翁が常に何處如何なる場合にも、常に其所に無形の靈を認めることが出来るのはこの思想の人であるからである。

〔家庭週報〕第三百七十五號 大正五年七月

女子大學卒業の地方婦人

女子と地方改良

婦人の社會的活動に關する問題は歐米に於ても數十年來頻りに研究されて居るのであるが、我國に於ても今後益々其必要を感ずるに至るであらうと思ふ。今其一例を擧ぐれば七八年前女子大學の卒業生豊臣と云ふ婦人が廣島縣山縣郡新庄村と云ふ處へ往つて其村に小學校及女學校を設けて獨力にて經營した、同村は此間亡くなられた、吉川男爵の居られた所で極く山奥の高い片田舎である。而して其村の少女等は小學校を卒業して嫁に往くまでは其女學校に入つて其地方に至極適切なる教育を受けるのである。獨り學問のみならず實業方面の知識を與ふる爲めに、學校の畑で農作をさせるとか、其他裁縫、料理等總て實際的の方面を教へるのである、畢竟唯女子のみを好くするにあらず。女子を好くすると共に家庭を進歩せしめるのである。従つて家庭が基礎となつて村が進歩するに至るのである。今日では互に意思が疏通して村長始め小學校長醫師其他有力なる人々が互に盡力して學校を輔佐して居る。校舎を建築せし時の如きは百數十圓を支出した人もあつた。此感化は隣村にも及ぼして居

る。斯の如き有様であるから、學校の成績も極めて宜しく、農村の氣風も革まり、副業なども餘程盛んになつて村が非常に進歩して來た。而して同女史は其村の爲めに生涯を捧げて献身的にやつて居るから、村の人々は村母と稱して、非常に尊敬して居る。従つて小學校長なども土地の人であつて餘所に出ない、實力はあるけれども村の爲めに盡すと云つて一生懸命にやつて居る、又縣廳でも知事などが視察に往つて其功績を認めたので差分か補助しても好いと云ふ事であるけれどもそれを受けずに獨立して村自身でやつて居る。單に教育のみならず、一村を指導すると云ふやうな氣風を養ひ、副業の如きものは組織的に發達せしむるやうに力め、又誰も彼も都會に出なければ教育を受けられぬし、又事業を發展する事も出来ないから、田舎は詰らぬと云ふやうな考を一轉せしめて、自分の土地を基として國家の爲めに盡さなければならぬと云ふ事になつて居る。故にさう云ふ氣風が村に生ずれば村は發展するし又村が餘程好くなつて來る、青年は希望に充ちて獨立自營して己れの業を守るのみならず、又村と村とが共同して組合等を設け、其土地に應じた方法を取つて地方を發展せしめ、又教育を進めて往く事を得るのである。

村女の中心

女子大學や女子高等師範等を卒業した高等教育を受けた人々が地方に歸つて地方の爲めに若き婦人の爲めに中心になつて活動し、而して教育を進めて行き、更に精神教育に依りて徳性を涵養せしめ、副業の如きは組合と云ふやうな組織的にして、其地方に應じた事業を起す事になれば、其地方を發達せしむるのみならず、自分の爲めにも利福ある事を經驗されて來るのである、而して無暗に危険を冒して無暗に都會に出たがるやうな風が無くなり、喜んで郷土に安着して耕作に従事するの氣風を養ふ事は左程難事で無いと思ふのである。

處女會長に女子大卒業生

女子大學などに來て高等教育を受ける者は、殆ど地方から來て居る、予は生徒に對しても卒業後は成るべく地方に歸つて村の爲めに盡すやうに奨勵して居る、今一例を擧げたのであるが、斯う云ふ實例が外にもある、其等の婦人が地方の中心となつて處女會の如きものを設けて指導したならば、漸次實行して往けるやうになるだらうと思ふ。前に述べた新庄村は至つて寒村であるが、將來村の指導者にする爲めに女子大學に一人在學

せしめて居る、斯の如く一般よりも進歩した處の婦人を多く出すやうにすれば漸次其目的は達せらるゝだらうと思ふ。

郷里に歸つて活動せよ

曩に平田子爵が内務大臣たりし時、男女を區別せずして組合組織にしやうと試みた事があつたが、人物が信用出来なかつたり又其等を運用する頭腦乏しくして人物が無い爲めに遂に不結果に了つたのである。斯の如き事は指導者が無くては行はれない、故に其指導者を養成する事が根本だらうと思ふ。それには矢張其土地の人が好からうと思ふ。前に述べた豊臣女史は熊本縣人であるが、他縣に往つて献身的に働いて居る、それも好からうけれども、女子大學などに在學して居る人々は多く地方から來て居るのであるから、其等の人々が故郷に歸つて其村の指導者となつて活動するやうにすれば最も好からうと思ふ。何故かと云へば自分の村の事は自分が最も能く熟知して居るのであるから其地方を發達せしむる上に於て頗る好都合であるからである。而して廣い關係から問題を研究する力は既に養つて居るのであるから、其人が志を立て、如何にせば最も適切であるかと云ふやうな點を發見して往けば好からうと思ふ。

組織的婦人聯合

然かし大體に於ては其間に大方針を立て、全國に連絡を保つ事が必要であると思ふ。而して其目的を達する爲めに修養するには結局精神生活を向上せしむる方面と、教育を進歩せしむる方面とが無ければならぬ。一方には實業方面を開發して往くには、矢張組合の如き組織にして廣く指導して其地方々に應じた産業を興し、副業を盛んにし、而して更に國際的に發展して廣く全國に關係を保たせる必要があるだらうと思ふ。修養方面と實業方面と兩者相俟ちて自分の爲めに働く事と、國家の爲めに貢獻すると云ふが如き献身的の精神と兩方面備はつて居なければならぬと思ふ。而して其中心たるべき指導者を養成して指導者の間に一の大なる組織的關係を保ちて婦人を指導する團體として教育を適切にして往くやうにならなければならぬ。それ故に今後地方には漸次其地方々に適應したる大なる聯合が實現せらるゝに至るだらうと思ふ。

〔都會及農村地方青年團及處女會號〕第一卷第七號

大正五年七月

タゴール詩聖を輕井澤に迎へて

今夏私共の最も尊敬する處のタゴール詩聖をこの輕井澤の地に迎へました事は、私が極めて光榮とし且深く歡ぶ所でありませぬ。我が日本女子大學校の三年生並びに指導者、寮監、卒業生等は詩聖がその繁忙中の餘暇を割いて海拔三千尺の此の自然の高原に來臨せられたる厚意に深き感謝を捧げるのであります。

今回此の理想的なる精神的空氣の裡に詩聖の人格を通して、其の感化を眞に經驗せんとして、親しく詩聖の指導の下に瞑想の生活に數日を送るを得るのは實に私共全體にとつて至上の好機を與へられたのであります。吾が學生並びに吾等は此の稀有の特權を深く味ひ、其の眞義を實現することに全力を注がうと決心して居ります。

現代は婦人の世紀に達したと云はれて居ります。洵に歐洲に於ては悲劇中の最大悲劇の關門を経て婦人の世紀が來つたのであります。即ち戰亂中に行はるゝ慘忍野蠻等の禍害は母たる婦人の柔和なる心胸に畏懼を抱かしました。その結果彼等が現在の確信は是である。即ち『人類に眞の安寧秩序を齎すには狭き利己的の愛國心も、野心の充ちた軍國主義の作る軍備も、物

質主義による致富も何等の効果はない。唯此の目的を達するものは眞の普遍的なる人類に對する愛の他にない』との一事であります。而して彼等は既に本能的に狭く孤立して居た精神の障壁を悉皆撤去し、又人種民族の差別偏見を排除して、正義のために立ちて世界の平和を齎す者とならんと決心を固くしたのであります。現に婦人の精神にも位置にも共に著大の變化が起りつゝあるのであります。

日本婦人は此の世界的戰亂に對して全然無感覺ではない。彼等も亦二十世紀の婦人は天より偉大なる使命を賦與せられた事を漸く自覺して來たのであります。此の使命は體力に於ても、志望に於ても、遙かに強盛なる男性の未だ成就し得ない處を、纖弱ではあるが精神的である婦人の力を俟つて完成すべきであります。日本婦人の専心修養に努むるのは吾が固有の謙讓、忠實奉仕等の徳を實現するのである。而して近來は之に加ふるに婦人も國家の要素たる責任を自覺して來ました。且日本國民の將來に於て物質的慾望に走り、現在の享樂主義に向はんとする危険を覺り、如何に精神修養の婦人自身に必要なかを認めつゝあるのであります。此の修養は婦人の美德、人格の力を俟つて始めて多くの禍害の裡にも國民の品性を高めることが出來ると信じます。

更に他の問題は東洋に於ける婦人と教育、並びに家庭社會の改良の問題が婦人の解決を俟つて居ることであります。是等の國民的問題の解決には日本婦人は支那、印度等の婦人と一致協力することが極めて必要であります。尙又必要なのは世界の平和を恢復し、人類の眞の安寧幸福を進むる事であります。之は東洋婦人が西洋の姉妹達と一心協力して懸らねばなりません。併し斯くの如き大使命に當るには女子は餘りに纖弱である。又年齢經驗からいつても日本婦人は全體として現代教育史上乃至婦人活動の經驗は甚だ若いのでありますが、併し假令力は弱くとも年は少くとも、古來纖弱微力な者が、個人としても國家としても天來の使命に神の器として選ばれた例が尠くないことを思はねばなりません。日本の婦人は實に現代の活ける事實を明らかに認めて其の使命を果すに適當ならんとして、専心其の修養に教育に務めて居るのであります。今此處に集つた青年婦人達は、斯ういふ境遇にありて、貴下の指導を待つて居るのであります。其の指導により眞人生を更に廣く見、而して神聖なる本性の意義を更に深く覺り得て、社會に於て眞の價値ある要素となり、天與の使命を忠實に敬虔の念を以て成就せんことを期するものであります。之が更に詩聖の來臨を歓迎する所以であります。

然し輕井澤の事は之だけで盡きない。輕井澤は獨特の境遇をなして居る。當地に來遊するものは日本内地のみならず、西洋の宗教家が多數あつて、此の地に特殊の純潔簡素なる社會を實現して居ることあります。

今宗教界の精神は徐々ではあるが驚くべき變化を遂げつゝあります。從來宗教界には分派が著しくて、異つた意見、思想を持つてゐる人々の間には互に相容るゝ事は殆ど不可能と思はれた。況して其等の間に相互の理解や長所を認めることなどは思ひもよらなかつた。宗教が餘り主觀なる時自家肯定、自意識的に傾き易く、爲に他を包容することは全然不可能で、相互の特徵ある歴史を滅ぼし、各々自家の形式信條を以て他を征服せんとするものであります。之を指して宗教上の軍國主義とも云ふべきか、併し現代の世界は各宗教の心髓は一である、相互間の差別と見えたものは形式上の事で、根柢をなして居る眞理は異つたものではないといふ事に着目するやうになつたのであります。併し各宗教が其の根本に於て調和することは從來の歴史、慣習上、甚だ困難であります。又各宗教を調和せしめん爲に各自の特色を奪ひ、全く不分明な性質のものに化成する必要はない。否之に反して其等特種の要素を有するは社會を豊富ならしむるに缺く可からざるものであります。各自の人格、各宗教、

各民族の性格を發揮するは今後理想の王國の實現するに必要な要素であります。

此の眞理は一面逆説を含んで居るので、人間は之を認めるのに多くの時を要した。一の中に多を含み、調和の中に幾多の要素を含み、統一の中に個性を藏するといふ眞理は中々容易に覺られなかつたので、古來幾多の迫害、争闘の歴史を繰り返したのであります。否之が爲に文明の進運を阻止した事は幾度であつたであります。然し今や新時代が來つた。賀すべし、大なる協同組織の生るべき時機は來つたのであります。

現に見渡せば淺間山は斷えず噴煙を天に送つて『夜は光明となり晝は蔭となる』てふ表象を示す自然の境に宇内的大精神は成長しつゝあるを見るのであります。此處に目に見えざる精神的の崇高なる殿堂が東西精神の特長を融合して建設されんとして居ります。

タゴール詩聖！ 貴下の來臨によりて此の精神的生産物たる此の殿堂は更に又新たな要素を加へんとして居るのであります。茲に即ち印度、支那、日本の東洋文明の代表的要素は融合して西洋の精神的文明を結合提携して第二十世紀の大藝術を作らんとして居ります。是等各國民の無形なる精神的同盟は東洋の人格を益々強大ならしめ、神の造られた此の世界に最も麗し

き貢獻をなすことは必至であります。

斯くの如く始終易らずに精神的殿堂を世界に建設する全能者の功業は實に驚嘆すべきものであります。世界の同胞中泰西の人士にして吾等と同様の信念を有する人々は今此の席上に居らないけれども、其の精神意思に於ては吾人と毫も隔る所なく、共に宇宙の大靈に讚美を心より献げるものであります。假令今私がこれを以て世界的宗教大會の起點と做しても、其の想像が餘りに荒唐で夢想的であると考へらるゝことなきを信じます。而して貴下が當地より米國に渡らるゝ時、東洋の代表者たる使命を委ねられて赴かるゝ時こそ、此の輕井澤の地に於ける小き會合は世界に甚大の意義を齎すことになるであらうことを信じます。是等の事柄は私共が貴下の當地御來臨に對して歓迎を表する第三の理由であります。

〔「家庭週報」第三百八十號〕 大正五年八月

大正新女大學

今後の婦人の行くべき道

新女大學といふ意味にはさまざまの解釋がつけられるかも知れない。が私が今茲にいふことは今後の婦人の行くべき道とい

ふ意味である。少なくとも、過去の習慣的女訓に満足が出来ないといふ人々の爲めに新しい道、新しい訓へを示すものである。

家庭より社會へ

そこで過去の女訓といふものに當て飲めて育てられた婦人の活動範圍といふものはどんなところであつたかといふと、特別な場合の外は言ふまでもなく家庭である。ところが現在又將來に於ては婦人の活動範圍は其所にのみ止まつては居らぬやうである。否必ず今日の家庭に於ける婦人の力は漸次社會的にも又國家的にも又世界的にも擴大して行かなければならぬものである。これ既に過去の女訓の中のみにては満足な訓へを得ることの出来ない所以である。

外圍的境遇に屈服した過去の婦人

過去の典型的態度を一言で言へば、すべて他からの支配を受けてたゞ之を遵奉して行くといふまでのもので、言はゞ受け身の態度であつた事である。昔の所謂女大學にしても其習慣的に作つた教訓の典型を示してそれに則つて行くといふ事が最上の生活態度であつたのである。斯の如く婦人が外からの權威

に服従する事、習慣が作つた外圍的境遇に屈服して、始終他律的他動的な生活にあきらめて居るといふことを誰れも不思議とも不満足とも思はなかつたのである。否それが婦人の行くべき道の當然であるとして強制的に婦人といふものを道具視して居たのである。

自然の要求と婦人

ところが人間の天性は自我發展、自己實現といふことである。これは誰れにもある要求であり又潛勢力である。この力は常に外に向つて展びやうとして居るのであるから、この希望を達する所に人間の満足はあり、この希望を抑壓さるゝ所に人間の煩悶が起るのである。

婦人と言へども人である。この潛勢力のない者はない。さればいつまでも外圍的境遇に満足して居ることは出来ない。いつかは矛盾を感じて来る。そして煩悶を生じて来るのである。ところが、従來は婦人をこの人として——即ち潛勢力の自由を要望する人——として認めて居なかつたのである。それを習慣的に遵奉して來た婦人も亦永い間自己といふものを失つて居たのである。自己を見出すことの出来ない婦人は今日でも猶自己の生活といふことはない。たゞ道具のやうに家の爲めに備へら

れ、機械のやうに人の爲め國の爲めに働いて居るといふまである。其れ故その態度は常に不徹底であり不満足であり不安であるのは免れない。よし又何の不安も感ぜず別に煩悶することもなく、甘んじてその外圍的境遇に準じて居る人でも、それはいつまでもつゞく満足ではない。他からも認められず、自分も未だ無自覺であつても、人間の衷なる自我は常に何物かを要望して居る。それ故、いつ迄も習慣的束縛を受けて居ることは、この自我の覺醒に幾多の煩悶の原因をつくりつゝあるのと同じである。

先づ自己を見出せ

されば習慣的典型から出で、自我自由の心境に進まうとするには必ず先づ其處に慥かな自己といふものを見出さなければならぬ。それは即ち典型的束縛を離れて無限絶對に生きるといふことである。自己の對照は小さい人爲的の習慣ではない。規則ではない。無限絶對の生命に合致して行くのであるといふことを自覺して、初めて其の人の生活は満足し徹底し、其人の價値を見出され其の人の活動は愉快になる。さうして、自己に徹底した人は其の活らく所、家の爲めにも社會の爲めにも國家の爲めにも満足を感じ、心から盡すことが出来るのである。

自覺あつての美德

家の爲めにする、人の爲めに盡すといふことも先づ自分に信ずる力があり、價値があつて初めて其實が擧げらるゝのである。従來の女訓にも犠牲従順の徳といふことは女徳の根本として説いてある。けれどもこの犠牲従順の徳も、自己を知らず自己の價値を認めず自己の力を信ぜずして何處にその美しい犠牲がさゝげられやう。何處に眞の従順の意味の實現が見られやう。意志のない従順偶然的犠牲行爲は婦人の美しい心情の流露といふことは出来ない。

婦人がその愛に於て其の態度に於て徹底しない原因は其處にあつたのである。社會も亦婦人を認めずして徒らに要求のみしたことは間違つて居たといはねばならない。

自己の價値と自己の信念

さて人間が自己の價値を見出すといふことは即ち自己の信念を見出すといふことである、生きた信仰を得るといふことである。自己の衷心から湧き起る自由の要求に應じて自己の生命の發展の道を見出すことである。

煩悶と満足

人間に煩悶があるのは自我發展の自由を得ないからである。この自由を得る處に満足があるのである。これを外からされる時即ち受け身の態度にあつてする時は自分も不満足であり人にも不満足を與へるのであるが、これを衷なる自己の叫びに眼醒めて自分自身が其の途を拓いて行けば自己の價値を見出し、自己の發展を成し得て初めて自己の境遇、自己の生命に對する満足が得られるのである。彼の婦人の美德の權化とも言はるゝナイチンゲール、メリーライオンといふやうな人々も要するに人間の誰れにも宿れるその潛勢力の自由の流露を得たといふに外ならぬのである。その自己を見出し其の自己に徹底した信念で生活を実現したといふべきである。

今後の婦人の覺悟

大正の新女大學といふは要するに今後の婦人の覺悟を促すものである。先づ婦人自身が其の自己を見出すこと、さうして其の自己の價値自己の力を認めて其處に自己の信念をつくり其の生活に徹底することである。信念とは『生きた信仰』といふことである。

今日の宗教といふ宗教は既に何れも皆其の形式に陥り信條に捉へられたものが多いのである。故に宗教の形骸ばかりを見つめて居ては生きた信仰は得られるものでない。眞に生命の土臺から築かうと思ふならば眼を轉じて自己を見つめなければならぬ。自己が擴大した無限絶對と合致する所に眞の宗教の生命が生まれるのである。

今後の婦人の修養

今後の婦人の修養といふことはこれでなければならぬ。自己の爲めの修養、自己の發展、自己の生活の徹底といふことから始めねばならぬ。これと同時に人の爲めに、家の爲めに又國家の爲めに社會との爲めに盡すのである。即ち自己の生長につれて其の活動範圍が擴大されて行くのである。

されば自己の安心、自己の満足、自己の徹底といふことは同時に絶對と合致し神と一致する處の無限の生命の價値に入るのである。

この生命は宇宙の進化と共に進み永久に止まる時はない、その生活状態は何處如何なる境遇にありとも常に満足を得て且つ、停滞のない進歩向上の道である。今後の婦人は此處に生きなければ如何なる教訓も何の用にも立たぬ。今日は只今後の婦

人の第一義の生活に入るの第一歩に就て一言所感を述べて置く。

〔婦人公論〕第一年第九號 大正五年九月

今後の教育と宗教

一 緒 言

此の問題を考へるに就いては先づ其の要點を知らなければなりません。即ち思想の中心點をあげる所の其の鍵を握ることであります。それはどうしたならばよいか、即ち其の鍵はどこに求めたならばよいか、過去の歴史にか、又將來にか、又自然にか、自我にか、神にか、そも何れに求めたならば此の宇宙の凡ての問題を聞くところの鍵を得ることが出来ませうか。

渦巻の中心點を見よ

これが即ち此の問題の主要點となるのであります。歴史を研究する時にも、或は科學研究にも、或は人生問題を研究する時にも、其所には必ず一つの動き、渦巻いて居る所のその問題の中心點といふものがあります。一つの問題を究めようとする時には、先づ心を靜かにし、活眼を開いて其の中心點、その眞髓

を見出し、これに觸れるといふことが大切であります。

けれども人は或問題を草する時、先づ其の事柄、外形を成功させようとするに心が動いて動もすれば眞の中心に觸れることが出来なくなるのであります。これは知識階級に在る人の最も氣をつけなければならぬことであつて、この一點が轉倒すると、あとはもう動かなくなつてしまふ。つまりポイントを捉へそこねるとその問題はなにも運ばなくなつてしまふのであります。それで先づ私は此の問題を調べる人々に歴史論を讀んで見ることを奨めるのでありますが、それもたゞ歴史の外形、文字通りを讀むに止まつてはならぬといふことを申したのであります。心を潛めて肉眼に非ざる心の活眼を以て見なければ、凡ての準備も此の問題に對して徒勞になつてしまふやうなことになるのであります。

大問題の前提として、此の中心點を見出すといふことが、とりも直さず此の大問題の前提の一問題であつて、私が話さうとすることも先づ此所から始めなければならぬのであります。

一、實生活との一致點を見出す爲に——然るに此の問題は誠に廣い範圍に互つて居つて、時代から言つても三世紀に互つて調べなければならぬ。漠然としたその中から一の中心點を見出すといふことは誠に困難なことであります。然しながら此の

問題が困難であるやうに、今日若き人々の頭の中は非常に錯雜し、混亂して、その統一を得ることはより困難な状態であるのであります。斯くの如き生活を改良し、その混亂した材料を一つに統一して凡てに一貫した生活を見出さなければならぬ。

——此の實生活の一致點を見出すために此の問題の解決が必要なことゝなるのであります。

二、生活眼界を擴大する爲に——又今一つ此の問題を選んだことの理由は、自分自身の思想混亂といふだけではなく、自他の關係調和を求めることが非常に困難なことになつて居る。即ち茲に一つの思想の中心點となるべき大雰圍氣を作らうとしてもそれがなかなか障害が多くて出来ない。その障害の主なるものは、人間お互同士の心の眼界が狭いといふことに原因して居る場合が多い。即ち生活を改善し擴大して行くといふことは、その生活に一の中心點を見出して、それを根據として生活の眼界を擴大して行くことでなければならぬ。即ちこの問題は斯くの如き興味を懷かしむるといふことにも必要なのであります。

三、複雑なる思想の筋道を辿るには——第三の理由は人々の思想が益々複雑になり、益々擴大して行くには其所に必ず其の思想の筋道といふものが定まつて居るものである。それには又又緯があり經がある。この經緯が調和して織り出された所に眞の

思想の發達を見ることが出来るものであります。そこで昨年來研究を續けて來たエマーソン、メーテルリンクなどの思想家、又近くはタゴールとの接觸又はバハイなどのことに就いていろいろ研究したことは、とりも直さず今日の世界的運動に關係のある代表的人物、代表的思想を見出すところのもので、これが世界の大思想を織り出すところの經線となるものであります。つまり世界の東西に横に擴く流布して居るところの現代の世界の思想はこれであります。けれども現代の思潮といふものはこればかりではない。この外に緯になつて居る所謂歴史的思想の變遷といふものがある。これを今の此の問題を考へるに就いては先づ三世紀の前に遡つて調べて見ようと考へて居るのであります。此の縱横入り亂れて織り出されて居る所の現代思想を秩序整然と考察して見て、さうして今後のこと考へ及ばなければなるまいと思ふのであります。

四、將來に對する豫言——さて又かういふ思想上の問題を考察するについて必ず件つて起るところのものは豫言といふことであります。これは神祕的にも亦科學の方面からも出来ることであります。今日我々が此の世界の大思想の潮流を見、又これに對する將來の計畫を今日から立てなければならぬといふのも一つの豫言であつて、此の豫言をする爲に茲に先づ此の論題

複雜の統一

二

を掲げたわけでありませう。

大河がけふまでは流れて来たが、明日はどうかであらうといふと、それは人間の力で計り知ることは出来ない。けれども矢張り今日の如く、又今日に續くことが推定出来るやうに、世界にけふ迄流れて来た大思想の潮流も此の意味に於て豫言が出来るのであります。

鍵の音を聞け

そこで、此の問題を調べるに就いて先づ中世紀以後の即ち近代思想の起り、及びその後の變遷を知つて將來の人間生活はどう變つて行くべきかに及ぶのである。河でいへば水源を探り、さうして此の水流の將來に測定を及ぼすやうに、人類思想の變遷曲折の原因を歴史の古きに探り、さうして將來の考察に及ぶといふ筋道になるのであります。近代生活の源は中世紀に始まつて居る、其所に如何なる思想が源を發して居るか、其の鍵は何であるかを今から遡つて探つて見ませう。

此の問題は三百年に亙つて非常に大問題であります。併し此の秘鍵は時や所に制限されるものでないから——種々複雜にはなつてゐるが——その時代と時代を繋ぐ所の大生命の流れは深底に於ては秩序整然としたものがあります。それ故今茲に言はんとする大問題も要するに此の秘鍵を見出さうとする所以であります。されば此の問題を開く鍵は何であるか、凡ての複雜なるもの、統一なる秘鍵は何でありませうか。

大思想は大行爲

言葉は抽象になり易いから、これほどの大問題を考察するにも、言葉に表したところのみを見ては極めて單純に極めてありふれたものとなるのであります。けれどもそれを取り扱ふ人に依つて種々な程度に理解されて行くもので、つまり或問題が解るといふことはそれを自分が行ふといふこと、即ち自分の生活に實行して見て初めて解つたといふことになるのであります。思想は行爲であるといふこともある通り、例へば今日の歐洲戰亂は彼のニーチエの思想が獨逸國民の行爲となつたといふことを多くの人が首肯するやうに、又嘗てはルーソーの理想が主因となつて歐洲の大革命が起つたやうに、大思想は必ず大行爲になるものであります。感情は必ず生活となつて来る、否感情は

必ず生活の一階段であるから、我々人間の思想は決して空論的のものではない。考へることは必ずや何かの形をとつて生活となるものであります。人がものを考へ思想を練るといふことのその目的は矢張りその生活の効果を擧げ満足なる経験を積むといふことの爲に考へるのであります。言ひ換へれば行爲の眞髓、経験の本質は思想感情であるといふことが出来るのであります。

時代標語

そこで歴史に見る時代々々の思想の秘鍵を言ひ表す處の言葉、標語といふものがあります。此の標語はその時代思想を最も適切に表徴する所の言葉であります。

人々はこれに依つてその時代々々の精神を發表し、論證し、その論點を見出し、さうして結論を得るのであります。之即ち思想から言葉——言葉から又思想に入つて行くのであります。曩きに私はこの今後の教育及び宗教を論ずる爲には近世思想の淵源に立ち歸り、三百年前のことから研究しなければならぬと申しましたが、それにはその時代々々の標語を探つて見る必要が起るのであります。そこで中世紀から近代に移り變る時の時代標語即ち秘鍵となつたものは何であるかといふと、即ち

一、經驗に歸れ(Return to Experience)——といふことであります。經驗とは人間の經驗であります。人間の經驗といへば私自身の經驗、即ち人間各自が眼に見えぬ時代の潮流といふものを作つて行く所の經驗がそれであります。人間の經驗に立ち歸れといふことは人間の自我に立ち歸れ——或は又自覺といふ言葉がありますが、その自覺を促して——自己の價値を見出し、自己の本性を發見せよといふ意味にもなるのであります。これ即ちこの時代の思想潮流の轉換を言ひ表す所の標語であります。今一つは

二、自然に歸れ(Return to Nature)——といふことであります。これは教育にも宗教にも通ふ言葉であります。これは又最も近い時代標語にもなつて居る所の自己に歸れといふ意味にも通ずる言葉であります。

今日教育に於て用ふる標語は自發自展(Unfoldment)といふ言葉である。自覺、自活といふことも矢張り此の意味を言ひ表すのである。——人間の自己の中には非常な力があることを信じ、教育とはその自己の中にある力を發展せしめることにあるといふのであります。——或はこれを自我實現ともいふのであります。これは皆人間が自發的に活らき其所に生ずる所の結果をいふものであります。即ち人間の發展といふことをいふの

であります。

そこで茲にいふ自然に歸れといふ意味は當時の教育なり宗教なりが、あまりに人工的技的に走つて其の結果は自然の道から離れ、自然の力と分離、矛盾、衝突するといふやうな有様になつて居る。これが即ち人間を萎縮させ固定させた大原因でありますから、此の惰性を自然の本性に戻すといふことが教育の目的であります。

汝自身に歸れ

教育に於ける此の言葉は宗教の所謂 Return to God (無限に歸れ)といふ意味であります。即ち神に歸一すること、自我といふものが無限絶對と合一し吾が本性に歸ることをいふのである。尙此の自然に歸れといふことは汝自身に歸れといふことであります。即ち言葉を換へて言へば自由獨立といふことでもあります。従来は宗教のことは僧侶、祭司に任せ、そして神の默示 (revelation) は人間の誰でもは直接に味ひ経験することは出来ぬものであると信じて居た。今迄は教權に服し、外部の神に支配を受けて奴隸として仕へるより外になかつたのであります。併し今後の宗教といふことはさういふものではない。自身に歸り、自分の自然に歸つて銘々直接に神の經驗を味ふも

のでなければならぬ。自分が行ひ自分が信ずる處の態度でなくてはならないのであります。畢竟自分が經驗を積むといふことは自分が爲さなければならぬことであつて、神のことは知るには必ず僧侶や祭司によらなければならぬといふことはない。人間は凡て平等自由で神の默示に接することが出来るのであります。此の自分が活らき、自分が信じ、自分に重きを置き、自分に信賴するといふことがつまり汝自身の神に歸れといふことであつて、其所で此の時初めて先づ自然の研究にかゝつたのであります。科學の研究も初まつたのであります。さうして人間は各自自分を救ひ自分の運命を拓いて行かなければならぬといふので、改善的氣風が起つて來て、所謂改善的主義といふことも表れたのであります。

近代の大潮流

斯くの如く自分の制限をやぶり、自己の頑迷な城廓を破るといふことは、即ち神と自分が一つになること、言ひ換ふれば神に救はるゝことであるからして、教育でいふ所の自我發展といふことゝ、宗教の救ひ即ち自我解放といふことは又同一意義であることを知ることが出來ます。今迄は人間の罪は宗教の儀式、祭司の祈禱を通じてでなければ許されぬものとしてあつ

たが、今はさうではない。救ひは即ち自分の制限を破り狭隘に束縛されて居る所のその制限を破り、だんだん自己が擴大して神に合致し行くことに依つて救はるゝといふことであるのであります。これが近代の大思潮であり、また將さに生れんとする所の世界の大潮流であると私は思ふのであります。

近代史の開幕

さて以上のやうな一つの假説を得て、果して此の假説を以て今後もだんだんに發展して行くべきもの乎どうかといふことの研究にかゝる。果してこれが間違ひのないものならば、即ち此の鍵を以て現在の生活及び今後の生命を築き行く土臺を創造して行かなければなりません。そこで前にも言つた通り、世界の創造時代に如何なる運動が起り、如何なる経緯によつて織り出されて居るかを歴史によつて研究し、又これを綜合して見るといふことが大切な事となつて来る。その運動の最も著しくなつて居るのは十七世紀頃からであるから、其所から知つて置いてそれに續いて開く近代の開幕を見ようといふのであります。

中世紀に續いて開く幕

中世紀の幕が下されて、次ぎの幕の變遷進歩に遷るのであり

ますが、其の前後に於て作つた傾向に依つてこの時用ひられた時代標語といふものは何であるかといふこと、それは人本主義 (Humanism) といふことであつた。此の頃までは政治でも、宗教でも、教育でも、凡て人間は罪人として見做されて居つた。さうしてその罪は神權、及びその神權を取り扱ふところの大僧正の力によつてのみ救はるゝものとしてあつた。そして人間が自然に歸り、自我に歸り、無限絶對に歸り、さうして見出したものは自由の獨立であつた。人間の理性に依れ、人間の經驗によれ、といふ事を見出したのであります。これが道具立となつて人本主義といふ近代の幕は開かれたのであります。

二

人本主義の依つて來る諸潮流

一、文藝復興 人本主義といふ近代の幕開きは種々の筋書を以て飾られた。先づ第一は文藝復興であります。人間の經驗——殊に此の時はローマの人々が過去に於てした所の經驗を——復活せしめて人間の中心の思想、中心の感情、實際の經驗を見ようとした。

人間の經驗は迷信ではない。此の時まではバイブルも凡ての

人が讀むことは出来なかつたのでありますが、此の頃から總ての國語に譯し、總ての人々に讀み得るものとした。そればかりでなく古羅馬の法律、思想、文學とあらゆる人間の経験を尊重し、その跡を尋ねこれを復興せしめたのであります。

二、宗教改革或は政治改革　これに次いで起つて來たのは宗教の改革であります。今迄はバイブルを讀むにも僧侶でなければならなかつた。僧侶の人格を通して、僧侶の口を通してでなければならなかつたものが、人間は誰でも之を讀み、これに直接觸れることが出来るやうになつたのであるから、こゝに宗教の大改革の動機は作られた。ひいては又政治の改革といふことにもなつて來たのであります。此の改革は即ち改善であつて、此の改善の目的に向つて著しく進歩して來たのであります。

三、科學及び自然研究勃興　斯様にして人間は自然に歸り自然を研究するといふことに頭を向けて來ました。即ち科學及び自然研究といふことが始まつて來て、人間の力を以て人生を拓き、改善して行くといふ運動がこの時から勃興したのであります。

つまり此の近代になりまして、人々は唯人工的に組立てられた教權や信條、制度又は獨斷的眞理に満足し安心して居ることが出来なくなりまして、茲に自ら立つて根本的に宗教を研究し

て行くところの人本主義といふものが生れ出たのであります。さうして人は先づ己に歸り、人類の経験に歸り、自然に歸らなければならぬといふことになりました。ところが此の同じく人間の経験を重んずる所の傾向潮流は、これを主張する人に依つて各方面に各々の特徴を以て進んで來たのであります。

英國に於ける經驗主義

此の經驗主義が英國に流れて來たものは主に科學の方面から發展して *Hobbes* を構成しました。この主張者にはベーコン、ホッブス、ロツク、バークレー、ヒューム、スペンサー、ダーウィン等があります。この感覺派の主張を一言に致して見ると、事實を重んずるといふことであります。事實とは即ち人間の経験であります。人間が自らの眼で見、自分の耳で聞いたものは、眼に見ないもの、耳に聞かないものよりも、慥かに事實であることは言ふ迄もないといふのであります。この事實といふことを尊重した傾向がだんだんに進んで來て、其所に科學的觀察實驗といふことが起つて、それに依つて事實として取扱ふやうになつて來たのであります。その結果は即ち人間の感情よりも感覺といふ方に重きを置くものとなつて、この説が出来たものであります。

歐洲大陸の傾向

ところが茲に又同じく經驗主義を本とするもので歐洲の大陸に發展した傾向は、同じく經驗といふものを尊重するのでありますが、然しそれは感覺に重きを置かないのであります。即ちそれは理想主義 (Idealism) と云はれる所のものであります。此の派の人々の説は人間の經驗に重きを置くことは同じであります、その經驗たるや、單に感覺に於て知る經驗ばかりでは未だ十分なるものとは言へないといふのであります。否人間の感覺から來る經驗には極めて間違ひが多い。眞の經驗は必ず人間の内なる心の經驗にあるものとするのであります。即ち經驗の外部と内部との其の何れに重きを置くかに依つて此の二つの主義の差が出來たのであります。

理想派 (Idealism) は主として歐洲大陸 (佛、獨、伊) に流れた傾向であつて、その主唱者にはデカルト、スピノザ、ライブニッツ、ヘーゲル、カントなどいふ人々が相續いて系統に出てゐるのであります。

兩派の精神を捉へよ

經驗主義は斯様にして感覺派と理想派との兩方面に向つて發

展するやうになりました。斯う簡單に言つてしまへば感覺派は如何にも精神的でないやうに聞え、理想派は又事實上遠ざかるものゝやうに聞えるけれども、それは兩方の極端であつて、兩派は必ずしもさういふ淺薄なものではない。例へば感覺派にしても至極興味のあるから、この精神が發達しなければその生命も發達しないのであります。殊にこの派の創始者ペーコンは最も自然の發見發明といふことに力を入れたのであります。この方法は其の時代精神を傳説的より解放し、教權的束縛より脱したる自由を與へ、將に來らんとする新時代を豫言してその時勢を指導したのであります。近代文明に科學的研究、歸納的思考法の起つたのは一にペーコンの力といはねばなりません。

ペーコンの感覺派を繼承したのはホッブスであります、此の人は又ペーコンとは大分違つた方面を説いて、大分突飛な學説を主唱した人であります。けれどもその根本は矢張り人間の經驗から將來を知ることが出來るといふのであつて、この人の哲學も豫言といふことにあるのであります。それが今迄は豫言といへば何か奇蹟に依るものとし、所謂宗教家の專有に屬して居つたのであるけれども、このペーコン及びホッブスの説に依つて、その迷信は破られたのであります。

ホツプスの震動説

初めペーコンは自然を研究し、原子といふものを發見した。さうして宇内のすべての力をこれに歸した。ところがホツプスは更にその原子の震動といふことを發見した。即ち人間の經驗も凡てこの原子の震動が根本となつて居るといふのであります。即ちこの原子の震動が人間の五官に印象を與へ、その印象が我々に知識を與へる。すべての知識はこれを本として辿つて行かねばならぬものである。併し精神的事實は、矢張り宗教的默示に俟つべきであるといつて居る。即ち原子は集つて分子となり、分子は又機關を作り、この機關が集つて人間の肉體を構成するやうに、人間の社會といふものもそれと同じ組立てによつて出來て居るといふのであります。そこで此のホツプスの國家論といふのは、國家は原子の凝結したものである、この原子の結合が國家、社會である、それ故國家の政權或は宗教の教權は國家が與へて居るのであるといふのであります。

近代文明國の傾向

此の國家論は即ち君主專制の主張を意味するものであります。そこで哲學は單り思想上の問題に止るものゝやうであります

すが、決してさうではないのであります。この中にはその國民の教育も、宗教も、政治も、實業も、矢張りその思想と共に變遷し進化して行くのであります。ホツプスの國家論が君主專制の主張を生んだ様に、彼のルーソーの理想はインターナショナルデモクラシーであります。この二つの傾向もそのもとは何よりも同じ民約説に基いて出來たものであります。一つはホツプスの君主專制主義となり、一つはルーソーの共和政治となつたやうに、各々の傾向を以て發展して來て居るのであります。これ等の大思想が如何に後世人間の生活に影響を及ぼし、如何に又人間を進歩發展せしめて居るものであるかは、これを永い間の人間の經驗に徴して見れば明らかに了解出来ることであります。今日獨逸は國家神權論の極端に陥つて、斯くの如き狀態となつて居りますが、併し他の多くの文明國は何れも立憲的協同主義を信じて今後も益々その傾向に發展して行きつゝあるのであります。

四

歸納的研究法

さて英國に於ける感覺派の研究法に就いて茲に少しく述べて

見たいと思ひます。これは前にも述べました通り、主として萬有の現象を観察することに重きを置いたのであります。さうして其の現象から直接に受けるところの感覺を経験するのであります。これを尙一層有効にせん爲に實驗といふことを致します。即ち人工的にいろ／＼な假説を作つて宇宙の現象を観察する便宜を計るのであります。

そこで人間が得た凡ての経験は即ち人間の感覺と觀念に分れます。觀念とはその感覺から得た経験を反省思考して拵へた所の概念をいふのであります。この行き方が即ち歸納的研究法であつて、萬有の現象を斯うして一々に觀察して行つて、そこから宇宙の實在に達しようとしたのであります。人間が自然を重んじ経験を重んじ「神に歸れ」と叫んだのは、つまり此の宇宙の實在を知れ、其の實在に歸れといふ意味でありまして、リァリティー或はサブスタンスに歸れといふ言葉は當時の標語であります。

神の存在

其の時から問題になつた宇宙の本體（人間から言へば運命とも解されるものであります）といふこと、それから又必然的に起る神の存在といふこと、それ等のことに就いて人間の疑問

は止むに止まれない研究となつて來ました。宇宙の實在とは、神とは、そも如何なるものであらうか、といふことは凡ての人々が知りたいことであつた。そこで人々は種々の實驗に徴し、感覺に訴へ、知覺し、經驗し、さまざまの方法を盡して研究する、けれどもどうしても或點に行くと行き詰つてしまつて解決のつかない點がある、といふことになつて、茲に於て人々は懷疑に陥つてしまつた。ヒュームはこの懷疑論の主張者であります、之は當時の英、獨あたりの思想を代表したカントなどにも非常な刺戟を與へたものであります。けれども此の懷疑説は暫く續きました。最近のスペンサーに至りて、漸く始めて不可知論アノメンタリズムと成つて其の存在を否定することは出来ないけれども、其の存在の事實を人智を以て知ることは出来ない、つまり科學的研究を以ては解決のつく問題ではない、といふ結論に行き當つたのであります。

ダーウィンの進化論

併し英國の經驗派のこの流れは遂に人類の知識に新方面を拓かねば止まなかつたのであります。それは即ち近代の大發見たるダーウィンの進化論であつて、それ以來未だダ氏以上に出づるものはないと言ふほどの大發見でありまして、これは矢張り

科學的研究によつて出來たのであります。これは矢張り生物學から進んだものであるけれども、其の後此の思潮は段々發展して、一方の感覺派リアリズムの思潮と一方の理想派イデオロギズムの思潮とがだんぐんに融合して來た。つまり大陸の理想派が進化論に加はつて來て、今日最も進歩したのと言はるゝ進化的創造といふやうな思想に達することが出來たのであります。それ故科學的研究といふことも人類社會を啓發したといふ點に於てはその効果は決して少くないことを忘れることは出來ませぬ。

理想主義

斯くの如く進化論の權威は實に偉大なものであります。けれどもこの科學的研究法のみにては到底實在リアリティに達することの出來ないといふことも事實であります。

そこで人間は遂に此の外の道を見出したのであります。この道をさして新理想主義又は新形而上學ともいふのであります。此の新傾向は、近代に於て此の科學的研究と協同して、始めて古代及び中世紀に於て解決することの出來なかつたことが新しく解決せられて進歩した點が慥かにあるのであります。そこで此の理想主義の流れを遡つて行くと、大陸に流れた理想主義の——近代哲學の——元祖ともいふべき考へ方を新たに拓いたの

はフランスのデカルトであります。

デカルトとベーコン

ところが理想主義のデカルトと、感覺主義のベーコンの研究的態度に於ては相一致するのであります。唯併し其の行き方——筋道——が異つてゐるだけである。ベーコンは五感から來る經驗に重きを置き、デカルトはそれを轉じて先づ信念に達する内面直覺の經驗に重きを置くのであります。ベーコンの歸納的研究法に對してデカルトは演繹的研究法を執つたのであります。即ちデカルトの目的は絕對確實の本體に達するといふのであります。人間の情性によつて甘んじ易い、所謂よい加減なことでは満足しない、一時的の妥協を許さないといふのであつて、必ず絶対に信じ得る確信が出來る所でなければ満足しない、といふ決心を以て出發したものでなければならぬといふのであります。

演繹的研究法

演繹的研究の簡條を擧げて見ますと、

一、明白に、慥かに斯うであるといふことを自身で知るに非ざればこれを決して眞理とは認めない。

二、さうしてその眞理を追究して行く。この時或は果してそのものが慥かにさうであるかどうかを慥かめるのに困難な場合もある。けれどもそれを少しも迷がさずに研究を進めて行かねばならない。即ち困難なる點を分解して委しくその根本迄探し出すやうにして行かねばならぬ。

三、それは即ち初め單純より入り、一步々々登つて遂に複雑なる統一點に進む。

四、何事に對する時も必ず凡ての事實を枚舉して行くのである。それは一つたりとも見落しをせぬといふことを慥かめる爲である。

以上をつづめて言へば研究は初めに分解し、終りに綜合する、といふことであります。尤もこの方法は歸納法にも演繹法にも共通にあることであつて、人々はこれを「考へる力」といつて居る。

考へるといふことは學問の根本の力であつて、これは *think* (厚み) といふ文字から來て居るのであつて、厚さを拵へるといふこと、つまり人間の思想を厚みあるものとするといふことであります。

五

知識の土臺

人間の經驗には感覺知覺より來る外面的經驗と、直感から來る内面的經驗との兩方面があることは前にも述べたことであります。理想派に大切なるものは内面的經驗であります。曩きに懷疑主義を稱へたヒュームはこれを反省といつて居る、これは茲にいふ即ち考へるといふことであります。ともかくも、これが人間の凡ての知識の土臺となるものであつて、經驗するといふことはいろ／＼の方面から來る知覺によつて人間の頭の中に考をつくるといふのであります。その經驗——考——が澤山集つて厚み (*think* の語源 *stick*) の出來たもの即ち觀念を概念と言ふのであります。この概念と概念との關係を定めて行くものを判定といひます。一の判定と判定とを寄せて其所に新しい概念を作つて行くのを推論或は歸納或は演繹といふのであります。斯くの如くにして人間が知識を拵へて行くのであります。此の知識を作つて行くそれを思考といふのであります。

人間を最も有効にし進歩發展せしむる力はこの思考力であり

ます。此の力が弱ければ如何にしても眞の實在を捉へることは出来ない、そこで今日の學問中の學問の哲學といふものが起つたのであります。これを認識學といふのであります。眞理はどうしたならば認識することが出来るかといふことは、人間が最も追究して求むる所の大切なることであります。

つまり考へるといふことは結論をつけるといふことであつて、デカルトの哲學もベーコンの科學的研究法も、皆此所に始まつて又此所に統一されるものであります。それ故この歸納的研究法も、演繹的研究法も根本は相反するものではなく、否、常に律動的に交換的に拓いて行かなければならぬ。今日の學問はこの哲學的認識と科學的研究と相協同して出来るやうになつたのであります、そのどちらに偏しても遂に極致に達することは六つかしいのであります。

自明の眞理

然らばデカルトが眞理に到達した所の演繹的研究法の土臺となるものは何でありませうか。即ち眞理に到達したといふその證明は何によつて知られるのでありませうか。デカルトはこれを自明の眞理といつて居ります。これはデカルトの公理といつて、この自明の眞理から推理してだんだんに凡ての眞理に到達

するのであります。然らば又その自明の眞理とは何であるかと言へば、それは即ち人間の先天的觀念ともいふべきものでありまして、人間の天性、生れながらの人格の土臺として備はつて居るところの動かすべからざるものであります。それ故これは人工的に學ぶべきものではない。又ベーコンの所謂科學的研究を以ても解することの出来ぬものであります。

デカルトが茲に解決をつける迄には矢張り非常な努力を以て研究的態度を持續して來たのであります。一度此の問題に對すれば、如何なる學者も必ず陥るところの懷疑にも入つたのであります。さうして彼は矢張り感覺はどうも自己を欺くものであるといふことを知つた。さうして又その感覺は必ずしも實在するものでない事を知つた。今日の言葉で斯ういへば、誰にも理解の出来る、わけもないことのやうであります、併しこれは實に偉大なる眞理でありまして、自分の見るもの聞くもの一つとして儘かなものはない。併しながら自知、自念、自存といふこととだけは動かぬ眞理である。即ち自存といふことは自分が自分を知るといふことであります。「私は考へる、かるが故に存在するといふ」これがデカルトの公理の出發點であります。

意識は無限に通ず

私は「私に本質の一片を下さい、若し本質の一片を得たならば私は遂に宇宙の本質を捉へることが出来るであらませう」といふことを屢々申しましたが、その本質の一片といふはつまり此の自明の眞理であります。自己は神の内在に生きるもの、言ひ換ふれば、内在神に徹底したる個人といふことを、この時から人間が経験するやうになつたのであります。これ等は凡て自明の眞理よりして解るものでありまして、これほど大きな證據はないのであります。この自己が自己を證明して行くことが出来て初めて人の人格をも知り、又同情をも持ち、さうして理解のあるところ互に相愛するといふことも出来るのであります。のみならず、此の先天的觀念は完全無缺なる絶對者を意識することが出来るのであります。即ち我々は意識的又は無意識的に此の完全無缺なる無限絶對者に對する時に、必ず自分といふものゝ不完全なることを知るのであります。又此の反對に吾といふことを考へる時は所謂有限といふことを思はざるを得ないのであります。この有限を知ると同時に無限を思ひ、不完全を思ふ時必ず完全無缺なるものを慕ふのであります。ところが、この無限絶對なるものは人間の力で作り拵へることは出来ないのであります。如何なる經驗も、如何なる傳説も、有限なる人間が無限を作り出したといふことは聴かない。若しもさういふこ

とがあるとするれば、その結果は必ず原因より大なることは出来ない、人間よりもつと不完全なものでなければならぬ。これをいひ換ふれば我々の根本觀念が既に無限絶對より生ひ出たものであるから、それ以上に作り出す完全無缺といふものは無いのであつて、我々はその根本を同じうする無限絶對に行かうとして、完全無缺に達しようとするものであります。

これが人間の凡ての思想の生れ出づる土臺となるものであります。まして、我々の思想の根本は此の先天的に植ゑ付けられて居る、我といふ意識の此の自明の眞理から解つて來るのであります。さうして此の根本の意識あるが故に、無限の神を解するところが出来、又神の意識と交通することが出来るのであります。この無限の力をさしてデカルトは宇宙の實質といふたのであります。

實質の兩方面

「實質は何物にもその存在を支配されることはない、さうして此の實質の一方面は物質に表れ、一方面は精神に表現するものである」といふ原理を自覺したのはデカルトであります。けれども此の二方面の表現には未だ完全なる調和關係を見出す所まで行かなかつたので、デカルト自身は「物質は根本的には死ん

ものである、ただそれが活動するのはその本質から刺戟を受けるからである」と言ふ説を稱へました。

このデカルトの説を受けて、尙その及ばざる所の新生面を拓いたのはスピノザであります。前にも述べたやうにデカルトの出発點は自己といふことであります。スピノザもその潮流は同じであります。彼はその出發點を無限絶對に置きました。所謂最大なる公理として神をその出發點としたのであります。即ち神を知ることが出来れば凡てのものが解り、神を見ることを得れば凡ての事が見える、即ち神の存在といふことが一番根本的な確實なるものであるとしました。さうして彼は實に此の思想を生活したのであります。實に神の愛に充たされ、否神の愛に酔うてゐる境涯といふのは此のスピノザの生活であります。彼の生涯は神の本質に依つて支配されたといふべきであります。

故にスピノザはデカルトのやうに神の證明を要しないのであります。何となれば神そのものはスピノザの生活であり、その在るものは神であるからであります。即ちデカルトは本體を精神と物質の二方面に分ち、神の様式はその精神界にあるものとしたのであります。スピノザはその區別はない、彼は一元論であります。例へば殆んど個人といふことさへ認めないのであ

りまして、種々様々なる人格種類は皆實質の中に抱擁せられて、個人といふはたゞその神の活動が爲す個人に過ぎないものであるといふのであります。

六

スピノザの汎神論

スピノザは「神は超越的のものではない、世界の凡ての内因的原因それが神である」と言つた。

さうして彼の生活は即ち神と合一し、彼の概念は神の意志そのものであります。これ即ちスピノザの汎神論の根本原理となるべきものであります。「神を知る」といふことはスピノザに於て最高の道德論であります。即ち凡てのものは神に於て見ることが出来る、その状態に達することは人間最上の生活であつて、此の時人間は始めてその迷ひの根本たる五感の情慾に妨げらるゝことなく、凡てのもの皆適當の活らきを得るものである事を彼は信じ、さうしてこれを生活したのであります。然らば人間が神に奉仕するといふことは克己、捨慾、所謂自我といふものを打ち捨てねばならぬかといふと彼はそれを否定した。否寧ろ自我實現、自己主張といふことに於て人間は始めて

神を知るものであると主張したのであります。

この思想はスピノザに於て最高潮に達したのであります、これは恰も十七世紀から十八世紀に遷らんとする世界思潮劇の序幕となつて、やがてライブニッツ、ヴォルフ等といふ主要なる登場人物が始まつて、十八世紀の一大思想變劇が演ぜらるゝに至るのであります。

十八世紀に入る

斯くの如く十七世紀は人間が始めて「自分で研究する」といふ事を知つた結果、知的運動が旺んに起つた時であります。それ故この時を主知的傾向の時代と言つて居ります。それが十八世紀になりますと、だん／＼感情哲學の方面に傾き所謂主觀説が盛んに起つて來ました。十九世紀に至ると更に進んで意志説の傾向を表して來ました。

但し此所に感情とか主意とかの文字を冠して其の時代々々の哲學思想を言ひ表すことは、ただ單純にその時代思潮の中心となつて居るものを言ひ現す爲であつて、必ずしも感情哲學の時代はそれ一方だけであつたといふ意味でないことは、殊更に説明を附すまでもないのであります、人間は言ふ迄もなく此れ等のものを區別して生活することは出來ないのであります。け

れどもその時代思潮の高潮する傾向は異つて進んで居るといふことは出來るのであります、これを後世より見てその時代の傾向に依つて各々その特徴をとつて斯くの如き部分的の名を附するのであります。

啓蒙哲學

さて十八世紀の幕の梗概とも言ふべきものは先づ啓蒙時代といふ言葉を以て代表する事が出來るのであります。啓蒙といふことはこれを字義からいふと英語のエンライトメントといふ文字から來て居るのであります、これは光を以て暗きを照らすといふやうな意義を持つた言葉であります。此の言葉は知的にも精神的にも使つて居りますが、所謂暗黒時代を新しい光で照らすとか、曇つた心、懷疑の思想を光で照らすといふやうな意味にもなるのであります。即ち啓蒙とは閉ぢたるを啓き開けるといふことで、開けば即ち光りを入れ、暗きを照らして鮮明にするのであります。

そこで十七世紀の知的研究は漸く高潮に達したと同時に、人間の要求はこれ以上に出たのであります。言ひ換ふれば知的研究のみでは満足する事が出來ない。即ちこれ迄の自然或は實在に對する純正科學、純理學説を以ての説明ばかりでは満足が出

來なくなつて來たのであります。此所に十八世紀に入つてからは、人生そのもの及びその人生の義務に關する個人的問題に入りました。今迄の研究が實在の原子又はその根本の問題に就いて努力を續けて來たそれよりも、今一步進んだところの人間の内部經驗即ち心理學の方面に傾いて來ました。言葉を換へて言へば、前に比してはもう少し實際的生活方面に進んで來たのであります。それ故ホップといふ人は此の時代の研究をさして人間學と言つて居ります。即ち人間の眞の研究は人間であるといふことになつて來たのであります。此の研究の特徴はやがて實驗心理の根本研究及びその應用發明の方面に向ひ、それは個人主義の徹底となり、或は團體的生活としては政治の革命となつて、やがて獨逸に佛蘭西に、英國に各々の特色ある潮流の啓蒙運動となつたのであります。これが又各發展し、各交換し、各經驗して、次代十九世紀の潮流を作つて、或は宗教界の啓蒙、教育界の啓蒙、政治界の啓蒙となつたのであります。

獨逸の啓蒙運動

十八世紀の獨逸に於ける啓蒙運動の創始者又は指導者の第一人者としてはライプニッツを挙げねばなりません。この獨逸の啓蒙運動は英佛の啓蒙運動とも密接なる關係を持つて居ります

て、當時佛蘭西は數理的哲學の懷疑に陥り、英國は實行主義を固守し、獨逸は理想主義に固定してその極端に走つて居ましたが、此の時ライプニッツはこの停滞腐敗暗黒の世界に一道の光を放ち、新しい運動を創始したのであります。而も彼の運動は必ずしも佛蘭西や英國の舊思想及び現代思想を排斥したのではなく、否寧ろ根元を此所に發してたゞ之に新態度を以て接し、新價値を加ふる事に努力したものであるとも言はれて居るのであります。

ライプニッツの多元論

先づ彼は此の複雑なる思潮の——即ちスピノザの汎神論と英國の個人主義、獨逸の唯神論と感覺說等の——調和を計るべく、其の方法として彼は先づ理想主義者としては英のロツクよりも、デカルトの説を執り、又個人主義者としてはスピノザよりもロツクの説を執つた。さうして彼が到着した點は個人的理想主義サブスクリプシブであつた。彼の學說の要點は精神的個性といふことであつて、即ち宇宙の凡てのもの皆この點に歸するものであると主張するのであります。さうして凡てのものゝ特殊といふ事を認めたのはライプニッツである。けれども彼は又その間には必ず統一がなくてはならぬ、つまり此の特殊は又必ず神の力に

支配されて遂に統一調和するものであるといふ事を説いたのであります。これをライプニチの前定的調和原理と申します。

曩オラスきにデカルトは自我の實在を見、スピノザは神といふ實質オラスを見た。

ライプニッツは此の二つの説の極端なる點に於て、自己の個人の中に神と又個性とを見出したのであります。つまり個人主義の徹底したもの、所謂徹底的なる多元論者であります。無數の特殊、個別のものは悉く精神的個性の原素となつて個人を建設するものであるといふ説を稱へたのであります。

斯くの如くデカルトとも一致し、又スピノザの説とも或點に於て略々一致する處を見ると、ライプニッツは將に合理派である。けれども又彼等と異つてロックと相一致する所は、恰も經驗派の感化を受けたものといふことが出来るかと思ふ。即ちライプニッツは神の存在を承認するには、先づ先天的觀察と經驗的事實とを以てし、殊に彼は前定的調和の原理を以てしなければならぬことを發見したのであります。

これが宇宙の無數の個體が各自の活らきによりて相和し、相歸するといふ思想を構成したのであります。これは即ちライプニッツの複雑なる哲學を解くところの秘鍵であります。

七

ライプニッツの思想はその弟子ヴォルフに至つて益々これを發展せしめました。斯くてこの思想は永く獨逸の哲學界を支配して居りましたが、一方英國に於てはその經驗派は益々その特色を發揮して遂に兩派は互に相分れて一致することが出来なくなるまでになりました。此の時哲學者カントは兩派のこの極端なる態度に満足せず、如何にもして尙一層進んだ眞理を見出し、てその調和統一を計らうとしました。

カントの調和

極端なる經驗主義と極端なる理想主義とは遂にカントをしてその調和者たらしめました。カントの思想も初めは矢張りライプニッツ、ヴォルフ及び英國の經驗派からその源を發して居るのであります。即ち始めライプニッツを受けて所謂抽象的原理によりて凡ての本質に到達し得ることを知つた。併し彼は又その抽象的數學的立論を以ては遂に吾人の内容本質たる宇宙の實在に到達することは出来ないことを見出した。そこで彼は再び經驗派に歸り、ロックの感覺主義を學ぶに至つた。その後尙又ヒュームの演繹説の正當なることを發見しました。茲に於て彼

人間は総合的能力即ち歸一的原理を有するに非ざれば、吾人の思想は脈絡なきものとなり、その結局は遂に懷疑に陥る外なきことを悟つたのであります。これは實に哲學史上カントの有力なる發見であつたのであります。併し尙その現象は何であるか (What is thing-in-itself?) その現象の内容たる實質とは何であるかは未だ疑問に附せられて居つたのであります。カントの弟子フイヒテに至りてその疑問は解かれたのであります。

フイヒテの「エゴ」

フイヒテは曰く「宇宙の現象の内容は自我(エゴ)(或は思想)である」即ち (Ego is thing-in-itself) である。凡ての事實は只單に自我の活動に外ならぬ。言ひ換ふれば自我の思想活動が宇宙の凡ての事實の根本である。故に物體はこの活動の結果に過ぎない。凡ての變化發展、凡ての創造といふものは皆自我の活動であつて、その活動の意義その目的も亦自我にあることをフイヒテは主張したのであります。

ロマンチズムの藝術運動

此の時一方には又感情派(ロマンチズム)といふものが起りました。この派の

指導者にはヘルダー、ゲーテ、シラーなどといふ人があつてもゲーテはその代表人物であります。この思潮は十八世紀の終りから十九世紀の始めにかけて起つた力ある啓蒙運動でありました。この派の主張する所も混雜せる思想の調和統一といふ事——寧ろ極端といはるゝまでに——を大いに力説したのであります。人間の趣味感情、人間の生命、殊に人間の經驗に重きを置き、さうしてその運動は主として藝術に依つたのであります。此の運動の標語を「詩は生命である」と言つて居ります。又「人間は理知に陥つて害せられた、これを活かすものは詩である」と言つて居ます。つまり科學の哲學が行き詰つて來て此所に一活路を開いたのがこの感情派の藝術運動でありました。ゲーテは又曰く、「實際と思想、自然と藝術は必ず一致しなければならぬ」と、つまり教育あり、修養ある社會が調和するといふことが、此の說の根本理想となつて居るのであります。そこで嚴密な意味で言へば、ゲーテは純粹な哲學者ではないとも言はれて居りますが、その根本思想は彼のスピノザの哲學より、又シラーの歸一哲學より多大な感化をうけ、又その系統を繼いで居ると言はねばなりません。茲にゲーテを擧ぐれば必ずこれと同時に考へさせらるゝ哲學者があります。それはシユライエルマヘルを擧げねばならぬ。シユ氏を擧ぐれば必ずヘーゲ

ルに論及せねばなりません。

シュライエルマヘルは感情論者であつて、ヘーゲルは主知論者でありますが、併しこの兩説を全く別々のものとして考へると非常な間違ひとなつて來るのであります。これは兩方面とも眞理があるのであつて、ヘーゲルの主知哲學もその目的は即ち調和統一といふことにある。この調和といふことも營にその時代のみの調和説ではなく、過去及び將來に於ける調和をも説いて居るのであります。唯主知一方向きの説ではないのであります。又生命といふことについても成長發展といふことを説く人であつて、即ちヘーゲルの所謂「だん／＼に意識する」といふことは、生命の成長發展を意味するものであります。

宗教啓蒙運動

先づ以上の運動が獨逸に流れて發展した啓蒙運動の思潮であります。畢竟此のロマンチズムの勃興と共に益々人間の經驗に重きを置くやうになつたといふことは、人間があまりに理智形式に傾いた反動であつて、此所に眞に生きんとする觀念、眞に生きんとする態度に覺醒して來たのであります。それ故此の運動は獨逸に於ける宗教運動が、ルーテル正統派に反對して、益々人間の生活といふことに、重きを置くやうになつた導火運

動として擧ぐるに適當なるものであります。即ちこれが獨逸の宗教界に於ける啓蒙運動であつたといふことが出来るのであります。

勿論哲學思潮も、矢張り宗教といふことが出来るけれども、此所に區別して言ふ場合には、それは主に人間の生活に關するものをいふのであります。

即ちこれが丁度三十年戦争（所謂宗教の新舊派の争ひ）に續いて起つたのであります。但しその戦争も當時の野心家に依つて起つたのであります。今日獨逸を中心に世界の大戦亂が起つて、今後世界の傾向がどうなつて行くであらうかといふ時に當つて、この三十年戦争とその當時の運動とは實に面白い對照であると思ひます。

信念主義 (Pietism)

三十年戦争の後に起つた運動を信念主義といひます。

Pietism は敬神とも或は信念又は經驗主義とも譯するのであります。要するに宗派的臭味を超越し又宗派的束縛から逃れたものであります。それで此所にはこれを信念主義といふ言葉を當てたいと思ひます。

信念主義の創始者はスピノザであります。彼は舊教は勿論の

こと、新教の方にも宗派は各オーストドキシ（自分の派が最も正しい派であるといふ頑迷心）のあることを見出し、先づこの束縛から救はれなければならぬ、といふのがその目的の最初の運動でありました。そこでこの信念主義の一箇條ともいふべきは、他の宗派を批難しないといふこと、所謂互に寛容な態度を持つといふことであります。これまでの宗派宗派の偏見軋轢は甚しいものでありましたが、その狭溢な態度を先づ破つて、廣い寛大なる態度を以て行くといふことは、この主義の重要な條件でありました。併しその運動としては常に當時の制度に反対しました。即ち従來の外部的傳説、外部的教權、既成眞理、既成宗教の儀式に列することに固く反対した。さうして専ら改善的態度を示し、宗教の個人主義を主張したのであります。即ち個人の宗教的經驗を以て神と全一し、神の愛を感じ、神の意識を感得するといふこと、つまり各自の體現を重んずるのであります。

尙今一つこの主義の特色として數ふべきものは、宗教の事を教職の専有とし、甚しきは人の救ひを其の商賈の如く營む弊を改革し、人をして直接神と交通せしむるといふにあるのである。即ちこれ迄宗教は僧侶牧師といふやうな人が教への特權を有して、此の人々に依つて人間の罪を贖はれるやうに考へて居

りましたが、さうではない。人間は誰でもこの宗教的儀式を司り、神の宮を司る事が出来るといふことを益々明らかに主張しました。

そこで宗教的權利、宗教的發表といふものは必ずしも祭主や僧侶によらずとも、眞に經驗し信仰する人によつて出来る。人間の罪は人間全體がその責任を負はねばならぬ、といふのであります。つまり信條から生命に、排外主義から寛容なる態度に、外部生活から内面的生活に移り變つて、神と直接に交り、直接にその暗示を受けるところの宗教的經驗は人々誰れもが味はつて、人格的價値は自動的に進めて行かるゝものである事、これを一言に云へば、日常生活即ち宗教生活でなければならぬといふことを主張するものであります。

八

更に信念主義の運動に就て

この問題を進めるに就いて私は先づ世界の宗教史を遡つて見ました。そして彼の歐洲に於ける三十年戦争の後に起つた信念主義に就いて説き初めました。が、時恰も大正五年は暮れて茲に新たに大正六年を迎へ、私等の生活、私等の思想にも亦新たに

一新紀元を劃すべき機會を與へられたのであります。そこで私はこの新しい心持を以て今再びこの信念主義に就いて述べようと思ひます。

信念主義勃興の當時

その時(三十年戦争後)宗教は人心を恰も繩目にかけて居りました。即ち宗教は救ふといふ事が目的であつたけれども、却つてその宗教が人間の意志をさまざま居たのであります。それはどういふ事であるかといふと、

第一、罪の恐怖 宗教といふものは、非常に人間を恐がらせたものである。未來の試験、神の裁判の日といふその時、罪のあるものは限りなき猛火の前に立たねばならぬといふ恐怖。

第二、原罪 これは人間の祖アダム、イブが罪を犯したその爲に、神の罰を受けて、我々人間は皆先天的に罪をうけて居るのであるといふ考、つまり人間の先祖が惡事を行ふた爲に連帶責任である、人間が先づその罰を受けねばならぬといふ恐怖心であります。即ち人間の本能は皆わるいものである。——佛教ではこれを煩惱といふ——それ故人間は生れ落ちるとすぐ罪の素質を持つて居るもの、即ち人間は性惡のものであるといふのであります。これは人間の力では救はれないものであつて、即ち

神の力に依らねばならぬといふ。此の恐怖心は所謂人間の自恃の心、自發の力をそぎ、人間を壓迫したのであります。

宗教の開放

此の人間の心を束縛する所の宗教の——今も尙残つて居るが——恐怖から開放するといふのが此の信念主義の運動でありました。即ちさういふやうに神は怖いものではない、人間は皆神の子である、故に人間は性惡のものではない、皆善性質があるのであるといふのがこの信念主義の主張する所であります。

然るに、當時の人間は未來を救はれん爲に、又その爲の宗教の儀式に忙殺されて、現在の生活を營む暇がなかつた。従つて今日の爲すべき仕事を怠り忽せにするやうになつた、所謂實際よりも空想に耽るといふ風で、一方に非常に宗教の儀式がやましなければやかましい程、その宗教の爲に人が益々眞の神より遠ざかり、又身體と精神が益々不調和に赴く、さうして益々身體といふものを敵視し、所謂禁慾主義、退嬰主義に陥るといふ風で——即ちこれが宗教の束縛より起る結果であります。

信念主義は……奴隸的生活からこれを開放する。即ち人間力の自覺、現世生活の價値、人世の進歩發展の目的、生ける神の發見といふことを目的として活動を始めたのであります。これ

即ち宗教の開放であります。

道徳の新傾向

之は延いて又制度の開放となりました。宗教ばかりではない。制度が人間の生命、財産の權利を奪つて居ることも甚しい。そこでこの自覺が遂にこの十八世紀の革命運動となつたのであります。即ち立憲政體を建設して、最も穩健眞摯なる意味のデモクラシーを主張するやうになりました。(デモクラシーといへど必ずしも米合衆國の如き政治ではない。矢張り個人の價値人格を認めて、その間に一致共同する義務、又その個人は國家に捧げるといふ義務を認めるのであつて、法の眞の意味のデモクラシーは立憲的君主主義と矛盾するものではない。)その結果として教育が寺院の手から國家にうつり、道徳が神學の信條から離れ、徳そのものゝ價値と代つて來たのであります。さて、茲に至つて初めて國際道徳の理想新傾向を生じたのであります。言葉を換ふれば、人間生活を重んずる人間の根本に在る所の力を信ずるやうになつたのであります。

基督教に及ぼした影響

この運動が歐洲の基督教にどういふ影響を與へたかといふ

と、

第一に、宗教の眞理、神の典型は僧侶、祭司の如き特殊の人間に選ばれたものゝ、特殊の階級の間が取りついで、一般人民に示すといふやうな從來の舊思想がやぶれ、凡ての神は凡ての人民、凡ての國民が直接に知ることの出来るものである、その天の光をうける所の特權は萬民等しく與へられて居るものであるといふ信念、その一大創造が發見されたのであります。

これ等は皆あまりに此の舊思想の偏見に囚はれた結果の頑迷なる束縛を作る信條に堪へかねて、其の基督教から分離したのであります。又左程にならずとも、矢張り純基督教を信ずるといふものゝ中にも、基督に對する感じは、矢張り釋迦やその他の偉人と同じき所の人格として見るといふやうな信者も出來たのであります。即ち基督教の教といふものと、自然に表れて居る宗教、則ち宇宙に普遍して居る宗教と、基督教の眞體本質とは同一のものであるといふ意味に於て信ずるといふのであります。

我等の信ずる道

此の信念主義の信仰が近代の宗教的啓蒙、宗教の開放をしたのであります。而も世紀から言へば二世紀を隔て、居るこの當

時の運動が、今日の宗教の傾向と恰も一致して居る點を見出すことは又意味深い事であります。即ち我々も亦今日の思想界に發見した新生面はこの信念主義であります。即ち我等の進むべき道、生きて行く道も亦この主義の中に發見するものであります。

之れを要するに、今私共が遠い歴史を遡つて研究して見るといふことの目的は、矢張り同じ運動が以前にもあつたことを知り、同じ眞理を矢張り舊世紀の人が言つて居るといふことを廣く人の説を参照する目的からであります。そして見ると、果して今我々が眞理として居る宗教は今茲に始めて起つたのではない。永い歴史の淵源を以て居るものであるといふ事を自覺することが出来るのであります。即ち人間の頭でたゞ想像して作つたものではない。非常に深い根源を持つて居るといふことを信ぜねばなりません。

信念主義の實行

此の信念主義が實行となつて現れ、又一方には益々思想界に深い根柢をなして動いて居る、一つの事實として見落してならぬものは獨逸に感情主義を主張したシユライエルマヘルの事であります。(この人は紀元一七九九年に生れた)この人の思想が

殊に獨逸の哲學、宗教生活に大なる變遷を起したのみならず、世界の宗教哲學に多大なる影響を起したものであります。氏は即ち宗教をドグマ(宗教の神學)から分離し(即ちドグマは宗教に非ずといふことを近代に云ひ出されたのはこの人の叫びが影響して居る。)同時に又宗教を行爲(儀式)と區別したのであります。

九

シユライエルマヘルの思想

シユライエルマヘルは斯ういつて居る。

「宗教に儀式は必ずしも不用であるとはいはぬ、けれどもそれが眞體ではない。然らば宗教の本質は何かといふと、それは即ち感情である。無限絶對と我、神と我、即ち無限絶對の宇宙の本質と、わが人格の本質とは同一であるといふ意識、これが宗教である」と。

この信念が當時の宗教界に一大革新を與へたのであります。シユライエルマヘルのその信念がどこから由來して居るかといふと一方は信念主義から來て居る。これはシユライエルマヘルが學校に居るときその友人にこの信念主義の人があつた。彼の

思想はこの影響を大いに受けたのであります。

今一つは獨のベルリンに於て彼の實際者にロマンチズムの信者があつた。その人から受けた影響も少くなかつた。(ロマンチズムは古典主義の反動主義で、形式を排して想像感情に重きを置く直感的のものである。これは當時の形式から來る無味乾燥の反動、又狹隘の主利説に反動したものである。)

これ等の説がシュライエルマヘルの信仰を作つたのである。兎に角この頃から宗教は眞髓であるといふことが教會の中にも入り、又一般人民の信條にも入つて來たのであります。

そこでシュライエルマヘルの説を補ふたのはヘーゲルであります。兩者は相俟つて必要な思想であつて、シュライエルマヘルの思想を研究するに當つて一方に信念主義の影響を見る必要があると同時に、このヘーゲルとの關係を見る必要が起るのであります。

理想派の弊を救ふ

畢竟此の時はアイデアリズムから神學が盛んになつて來て、さうして人々はその神學を宗教であるかの如く思つて居る。けれども實は其の煩に堪へず、殊に學究的人々は純な宗教生活を味ふことが出來ないのであつた。そこでシュライエルマヘル

は

「神學は宗教ではない。又説及び派は如何に複雑であり相異つて居つても、其の宗教の根柢である眞髓は同一物である。この神學の根柢或は宗教の根柢に横はる本質こそ眞の宗教である」

と言明したのであります。これを一言に言へば、茲に述べし如く、宗教を神學と分け、信念を儀式と分けたのであります。さうしてこの儀式は各自適當な形式を選択し、又創造してその宗教的生命を發表するに自由を與へたのであります。これから初めて宗教に寛容な態度が出来るやうになつたのであります。即ちシュライエルマヘルの學説がその實行方面に表れ、又實行方面が思想の方に影響して來たのであります。

ルーソーの教育法

宗教方面のこの思想と相影響して起つた今日の教育界、及び將來に起らんとする教育の出發點はどこに基因して居るかといふと、之は寧ろ佛、英より起つて居るといはねばなりません。この潮流を體現した中心人物は佛蘭西のルーソーであります。併しルーソーの考の根本は矢張り英國に出たロッキンクから來て居ると言はねばならないのであります。ロッキンは

「個人を社會或は制度から切り離した、即ち最も個人に重きを置いたのであります。さうして兒童は學校及び社會から家庭教師或は一人の特別の指導者にまかせよ。と言つて居ります。これは社會の惡感化をさげ、兒童の内に在る眞の自然性即ち眞の個人性を發揮する爲に」

といふのであります。此の主義は矢張りルソーの主張でありました。ルソーが何故に斯くの如き英斷的な事を叫んだかといふと、畢竟人間の自然性はよいものである。内から出ようとする性は皆よいものである（性善説）。その自然性が兒童を育てるのであることを發見したからであります。

然るに當時の人はそれを人工を以て束縛壓制し、そのよい先生と仲違ひをして邪魔をして居る。故にこの邪魔を除き自然性を育てさせなければならぬといふのであります。故に彼の教育法は、

第一に自然（性）にその教育の材源を置いて自動自發説に重きを置きました。第二に人即ち人の感化、第三に四圍の境遇即ち我々のエンバイロメントと、此の三要素から表れる自發力の活動が即ち自然の教育法であると言つて居る。そこで自然（性）の働きは神の働きである。その神の働きを人工的の社會組織又は學校制度といふが如きものを以て妨害することは甚しく個人

を害する第一の原因である、と。

人間一生涯の教育法

ルソーの原理を應用したのはベスタロツヂ、フレーベルであります。つまりこれが今日の歐米の新教育學の基となつて居るのであります。尙これを一層近代的に應用して居るのが、彼のモンテッソリー女史であります。モンテッソリー女史はこの教育主義の原理を以て廿五歳迄（兒童期）教育して行くことが出来る、——即ち大學教育迄及ぼして行くことが出来る——と言つて居るが、私はそれよりも尙斯ういひたい。即ちこの教育法は人間の生命のあらん限り、否將來永久に人間の人格意志の發展に資する教育法である。

そこでこれ等の教育法の標語となるものは自發々展といふこととありますが、此の自發々展（内から出て行く、實現して行く所のもの即ち人間性の範に従うて行くといふところの）の教育方面にも二つの方面を備へて居るといふことを一言附記して置きたいと思ひます。其の

一、自發の力 「人には潜在意識といふものがある。即ち先天的に備はつて居る力がある。教育は此の内にある無限の力を引き出すところのものといふ考」

二、目的的生活 「今一つは目的の本質である。即ち人間の生きる目的は完全無限といふものに達しようとして居るといふ解
釋」

これは獨りルソーの考へではない。前のヘーゲルも

「教育は完全原理である、それが進化的に表現する。そのプロセスが即ち教育である。進化するといふことは即ち此の實現である。その實現は人間の内に完全原理があればこそ、その無限完全に向つて、其所に一つにならうといふ目的を以て進むのである」

と云つて居る。フレーベルは又曰く、

「特性が兒童に表れるといふ事はもと／＼その特性が兒童の内に眠つて居る、それが眼を覺ますことであつて、これが即ち自我實現である。この故に兒童に與へる恩物又は活動に表れる形式は其の内に在るものを怠き起すところの表徴である」

と。ヘーゲルは又自己體現といふことを言つて居る。

「神は宇宙を一度に作つたものではない、無限の創造者である。さうして人間に於てはそれが即ち教育であり、それが文化である」と。

斯くの如く教育をする土臺は矢張り性(自然)を知らねばならぬ。これが近來兒童心理學が發達した原因であり、又自然研究

が盛んになつた所以であります。そこで十八世紀の特色は、宗教の實行(アイデアリズムとリヤリズムと調和協同したること)になつて來て、感情の方面に進んで來たのであります。(ヘンエライエルマヘルの如き感情哲學、又ルソーの本能感情趣味主義に重きを置いたなど) 即ち今迄の無味乾燥なる人生觀に人間の感情が入つて宗教の經驗が大いに豊富になつたのであります。これが又やがて十九世紀に入つては今度は大いに意志の方に傾いて來たのであります。

十

十九世紀の思想傾向

前にも一寸言つたやうに、十九世紀に於ける思潮、又は人間の生活は益々意志的になつて來ました。その傾向の出發點となつた主張者はシヨールペンハウエルであります。彼が出た當時には十八世紀哲學の後を受けた主觀的理想主義及び客觀的理想主義といふものがありました。その客觀的理想主義者にヘルバルトがあり、之に反對して主觀的理想主義を主張したのはシヨールペンハウエルでありました。さうして此の二人は共にカントに

起因してゐるのであります。

シヨールベンハウエルの解決

即ち、ヘルバルトはカントの所謂シングーインーイットセルフの不可思議論に反對したのでありますが、シヨールベンハウエルはこれに快き解決を與へて、此のシングーインーイットセルフは我々個人の人格の中にある物と等しきものであると斷言したのであります。即ち宇宙は意思であり、又我々の本質も意志であります。言ひ換ふれば意志は活動であり、活動は意志である」と解いたのであります。此の明瞭な學說の源はどこから來て居るかといふと、カントはその主なるものであつて、その外にプラト

ー又印度哲學から得たものであります。

カントは「時と空間は人間の知覺の様式に過ぎないものである」といつて居りますが、シヨールベンハウエルは此の「時と空間を超越して生活する」といふことをカントの説から見出したのであります。第二は印度宗教の經驗から來て居るといはねばなりません。さうして此のシヨールベンハウエルの意志説は進化論の所謂直觀力をも認むるものとなつて居ります。又今一つ教育の自我實現の眞の意味を發見する道を啓いたものであるといひ得るのであります。而して此の思想が即ち十九世紀の大潮

流となつて今日迄流れて來て居るのであります。

近代の意志説

此の説が今日になつては又非常に極端に走つたものと、又一方面には益々眞摯に穩健に發達して來たものと二方面に分れて居ります。ハルトマン、ニーチエなどは其の前者に屬するもので、多く獨逸に成長したのであります。英、米、佛の方に發達したものは極めて穩健なる意志説となつて、エマソンの自傳論、ジエームスのプラグマチズムなどによつて代表されて居る。佛蘭西に於ては最も近代に於てベルグソンの創造的進化説となつて發展して居るのであります。

善意志とは何ぞ

これ等の説が漸次發展するに従つて一方東洋から這入つた意志説、直感説といふやうなものが影響して、さうして今日の歐米の宗教、教育、今日の人生觀が出來て來たのであります。言ふ迄もなく今日の思想の流れの主なるものはエポリューシヨナリズム又プラグマチズムであります。今日の學說では自我の本質（ヘーゲルは先天的理性といひ、シュライエルマヘルは感情、シヨールベンハウエルは意志といつたその自我本質）は皆こ

の善意志であります。畢竟「我々の生活の各瞬間各鼓動は悉く意志の發露である。その目的に向つて居る活動愛、慾望の發表、凡ての根柢となつて居るものは意志の發露である」といふことになつて居るのであります。

即ち此の意志は生きんとする意志、益々完全に向つて進み、又過去の價値をも保存し、常に發展して生きんとする力であります。その力は無限に發展し永久に絶えない。即ち我々の内から出る力がそれであります。これ即ち宇宙の善意志の體現であります。此の力が人を愛し、此の力が犠牲となつて自我といふものゝ態度の表現をするものであります。

以上に述べ來つたものは實に遠く三世紀に互つた思想の變遷とも見るべきものであつて、そしてこの思想が、如何に我々人間の生活に大影響を及ぼしつゝあるのかを教へられるものであります。我々は茲に始めて劈頭に掲げた此の問題の結論をつけるべき所に到着したのであります。

十一 結 論

教育と宗教の假説

今後の教育と宗教といふ問題は即ち、今は誰も豫測すること

の出來ぬ戦後の問題に就いて語らうとするのと同じく六ヶ敷の問題であります。總て物の假説が出来るには其の動機がなければなりません。そこで私がこの六ヶ敷の問題を執つた動機は、どうしても今後の學校教育といふものゝ土臺を今から築いて置かねばならぬといふのが、私の此の問題の動機であります。さうして茲に教育と宗教とは、どうしても協同しなければならぬものである。又その協同は如何なる程度に出来るものか、といふそれに就いての假説を立て、又此の假説が果して眞の事實であるや否やをも確める爲であります。そこで私はこれに就いて、世界歴史の三世紀に互る事實に照らして見てこれを材料として此の問題の結論を今日つけようとするのであります。いふ迄もなく此の假説を立て、さうして研究するといふことの價値は此の最後に於ける結論、即ち私の創設的價値によつてつくのであります。

宇宙は普遍絶対の人格

私が二、三世紀の過去に遡つて證明した多くの事實は、宇宙の進化を建設するものは——或はその進化を案出するものは——one mind 即ち一の人格、無限なる一つの大靈があつて、その靈がこれを考へ、これを意識し、これを實現し、創造して行

くのであるといふことを示して居るのであります。又世の哲學者、宗教家が、又總ての人々が、非常なる努力を以て種々なる方面から研究して居るのも、その本質根本はたゞ大靈の研究であるといふことをも知ることが出来るのであります。

斯くの如く、世紀は變り人は違つても、人間といふものゝ歸する所、その根本は一致して居るといふこと、それを見ることが出来たならば即ち未來、今後の世界がどうなるかといふことも分らなければならぬことでありませう。

それで私は繰り返して申して見ます。近代過去約三百年の人間の經驗を研究して如何なる結論に達することが出来たでありませう。(茲に斷つて置くことは時間が無いため東洋に互ることが出来難い。我が國は三百年以前、恰も西洋に人道主義復興せる時、それ等の外國と初めて接觸したのであります。それ故我が國もその活動の影響を受け、今日三百年後の日本の文明にもその影響があること、及び近來西洋と相接して大いにその影響をうけて居ることは澤山にあります。これは總て茲には省略したのであります。)

此の三百年に互つて人道の研究が如何なる發展をしたかを見ますと、

第一 自我の本質即ち自覺といふ結果を生み出したこと。

第二 無限絶對の本質

第三 その自我と無限絶對との關係、即ち眞の宗教心——私はこれを信念といひます——を見出したこと。(從來の宗教といふ言葉には宗教又は既成宗教又は迷信といふ意味も入る故、それを除いた純なるもの、それをさして私は信念といふのであります。)

宗教は生命である

宗教といふものは所謂空論ではない。人間生活の事實である。故に今日の所謂宗教の弊害や、その傳說的固定などは科學が進歩するに従つて漸々破滅しつゝありますが、その宗教の生命は永久無朽であり、宇宙の生命と一緒に發展して居るのであります。否宇宙の生命、それは宗教といふものゝ生命であるといふことを段々に見出して來たのであります。これに伴つて既に學んだことは人間の自我發展といふ事であり、即ち自我實現の根本原理を發見したのであります。即ち人間の教育とは自我の自覺力、自動の發現であるといふことを見出したのであります。茲に於てこの結論は、第一宗教といふものは自我の本質と宇宙の本質との關係である。即ち我と神との關係であるといふことに盡くされて居る。つまり神の救ひを得るといふこと

は、自我の制限を開放すること、これが宗教の力である。宗教とは無限絶對の感化をうけ、或はそれとの融合によつて出来ることであるといひ得るのであります。

教育とその境遇

さうして又教育とは何であるかといふと、これは人間の自我發展及び自我實驗であるといふことが出来ます。つまり自我の束縛を解いて、眞の自我を實現するのであります。それには其の境遇といふのが必要であります。人間を養ふに境遇がなかつたらその感化をうけることは出来ない。兎も角も教育は個人といふ條件と又國家社會といふ境遇がなくてはならぬ。教育が宗教と違ふのは此の點であります。即ち教育は家庭、社會、美術、宗教等といふありとあらゆる凡てのもの全體が教育の境遇となるのであります。

同意味を表す専門語

併しながら結局、教育も宗教も自我といふものゝ發展、價値の増進といふ點に於て、内に經驗を積んで行くといふことは同じであります。たゞこれを言ひ表す言葉が違ふだけではありません。

例へば教育では自我發展、自我實現、或は實力養成といふ言葉、宗教に於ては救ひ又は人生の價値というて居ます。宗教では平和の状態を安心立命といふが、教育では満足というて居ります。經驗といふことはどちらでも用ふる言葉であります。或は宗教で喜びに満つる、或は幸福といふ状態を、教育では興味或は趣味というて居ります。宗教では融合或は自他融合といふ言葉を、教育では同化といふ言葉で表して居ます。宗教に於て感謝、祈り、働きといふと、教育では熱心或は努力奮闘といふのであります。

斯くの如く自我發展、或は保存、或は生きる、或は意志、と種々に申しますが、その自我の方面の經驗は宗教と教育とは同一物であつて決して別物ではないのであります。つまり教育も宗教も共に其の眞髓は内面生活であるといふこと、主觀的經驗にあるといふことは凡て一致して居るのであります。カントも云つて居ります。「道德を離れた宗教はない」又「凡ての迷信が絶滅した時に眞の道德が復活するのである」と。

宗教に於ける經驗の内容

併し茲にその教育の經驗と宗教の經驗との内容といふことに就いて言つて置かねばなりません。前にも言つた様に宗教の對

象は無限絶對であつて、教育の對象は國家、社會、家庭といふ有限的のものであります。さうして宗教の對象とする無限絶對は或はこれを神と名づけて人間よりも超越した經驗内容を有するものといふ觀念がある。そこで此の神と自分との間に出来る關係、即ち個人の内面の經驗といふことが、宗教問題研究者の第一に必要なことゝなつて來るのであります。その方法としては記録、傳説又直接の發表による人間の内なる經驗を知らねばなりません。而もその根本となるものは、矢張り自分の經驗であります。これが出來て初めて他の種々なる經驗を解することが出来るのであります。

宗教的經驗の様々

今我々は人々の宗教的經驗のさま／＼を知る爲に、先づ最も尊敬すべき人格者の經驗を求めます。次に又兒童、それから又野蠻人、罪人、病人、動物に迄も互つて凡ての經驗を普く當つて見ることも必要であると考へます。

之等凡ての人の經驗が宗教といふものゝ本質を知るのには大切な研究材料となるのであります。

今茲に世界の代表的人物の宗教に對する觀念を蒐めて、これを分類して見ると、先づどういふものになるかといふと、

一、自然が神であるといふ宗教「汎神教」 我が日本の所謂神様といふ觀念、スピノザ、プラマ教もこれに屬す。

二、「多神教」 八百萬の神を拜する類。

三、「ヘモシーズム」 神の中の神を拜す。

四、「一神教」 人格的神、猶太教又は支那の天を祭る宗教の如き。

五、「萬有を父とする教」 基督教はこれに屬す。

此の外に、或一部に於てはこれと其の方面を異にしたる宗教があります。即ち個人主義の立場に於て論ずる自我神といふものであります。——これはニーチエなどによつて可成り極端にまで走つたのであるが——其の眞理は畢竟内在神といふ自我の本質と、神の本質とは同じものであるといふことを申すのであります。宗教といふ對象物——自分の崇拜するもの——を自己、個人に置くものであつて、これは極端なものは先づ措いて、此の説の健全なるものには慥かに眞理があるのであります。即ち信仰、意志の自由、言ひ換ふれば善惡正邪を正す自己の善意は凡て神から來て居るものであるといふことを主張するのであります。

眞の個人主義と國家關係

徹底した宗教的個人主義の立場からいふと、此の國といふものはその個人が有機的關係を作つて出来たものであるから、その國の政策は自治でなければならぬといふのであります。所が近來此の自治制がたゞ個人の幸福功利主義となつて來て、凡て最大多數の最多幸福を目的とするやうになつて來た傾向があります。これも一部の道理はありますが、所謂淺薄なるものは直ちにこれを狹隘なる個人主義に取り入れてしまふ弊害があります。それから又此の個人主義に反對なやうで、個人主義に、根柢を置くのは社會主義であります。

之はもと／＼カントから發したものであつて、その主張は人道を以て神とする人道主義宗教であります。

尙これ等と區別して、倫理的宗教といふものがある。此の根源は目的哲學から起つて居るもので、宇宙は目的、意志、活動であるといふ。此の主張をした近代の學者はカント、その弟子のフイヒテ、又、リツチエル（獨逸）であります。

宇宙の目的は神の理想目的を打ちたてること、此の世界はその神の王國を此處に築くといふこと、即ちその神は道德的社會を建設するといふことがその目的であるといふのであります。是は近代の勢力ある一新潮流であります。

又美の宗教といふのがある。即ち神は愛である、感情であ

る、といふ此の信仰をさして美の宗教というて居ります。これを信ずるものは詩人に多い。タゴール又はバイなど分てばこれに入るべきものでありませう。

今一つ近來餘程盛んになつて行くのは意志の宗教であります。神の意志は善意志である。此の善意志と我の意志と協同して行くことが、大宗教であるといふのであります。そこで茲に、どういふ結論をつけるかといふと、即ち我々はその何れを眞として執るべきでありませうか。又此の研究によつて宗教の眞髓とは如何なるものをいふのでありませうか。各自の信ずるそれを表明して見たいと思ふのであります。

我等の神

ところで我々は、どうしてもその凡てのもの、眞髓を信ずるのであります。我々の神様は自然の美に表れて居るところのものが即ちそれであります。自然は神を組立て、自然は神を體現して居る所の意匠であります。其所に宗教の本質があるのであります。人は此の愛に、又美によつて無限の愛に行くことが出来ます。又道德界によつても神を見ることが出来るのであります。神は個人に宿つて居る。私の人格は、私の良心は、即ち神の聲である。神の心が茲に現れて居つて、我れは我が心の内に

正邪を判断するのであります。故に此の一個人の一行爲によつても神を知ることが出来るのであります。詰り神は宇宙の凡てに在つて、凡ての生命、凡ての事實、凡ての思想、凡ての調和、凡ての創造に表れてゐるのであります。

其所で人間は自分に最も近いものに於て神を見、その神によつて其所に宗教を作つて行くのであります。宇宙は神である。

宇宙に神は存在す。宇宙に誠なる、美なる、意志なる、凡てのものが一つになつて其所に絶対の神を見出すのであります。即ちこれ等の善意志は皆歸一するものであつて、凡ては其所に大融合、大統一、大結合をするものでなければならぬのであります。これが我々の宗教の對象物とする神のそれであると信じます。

來らんとする世界の宗教

そこで今は來らんとする宗教——或は哲學は、も一つ今以上に大なる調和統一をするものであります。所謂世界が信ずる宗教、世界が實現する所の道徳を見出して、これに向つて進まなければならぬ時が來るのであります。それは藝術、哲學、科學の凡てに於て徹底したものと、大宗教であります。言を換へて言へば國家社會の徹底したものは即ち宗教である、といふことが

出来るのであります。人間の活動、經驗はさまざまでありすが、どの方面に向つて如何なる天職を執らうが、それが徹底すれば必ず宗教になる。無限絶対の神を其所に見ることが出来るのであります。

生活の土臺も此所に

そこで教育の境遇には種々ありますが、それ等の徹底は必ず此の宗教信念になるのであります。故に眞の宗教と眞の教育の目的とする自己の發展は必ず一つに歸するのであつて、將來は教育と信念とは決して離るゝものではないことを信ずることが出来るのであります。今後の教育は茲に根柢を置いて進まなければなりません。此の宗教的根柢に立つて教育も始めてその眞髓に觸れるのであります。同時に今日の生活も此所に其の土臺を築いて行くべきものであると信ずることが出来るのであります。

〔家庭週報〕三三九十一號、四百四號

大正五年十一月、六年二月

新年に際して國民的自覺を促す

新年はお芽出度いといふ。その意味はどういふところから來て居るかといふと、即ち萬物が皆新しくなるといふことがお芽出度いのであります。新しくなるといふことは萬物が改められることであります。即ち進歩を意味するものであります。大正六年は明治維新から言へば丁度五十年に當り、又私個人の経験から言へばわが女子大學創立十六年に相當するのであります。どちらから言つても今年には誠に意味深い新年を迎へることあります。

此の意味深き新年を迎へるに當つて我が國家の生命はどういふ風に成長して來て居るかを觀察致しますと、先づ誰にも氣付くことは我が國の實業界が著しく發展したことであります。日清日露の戦役以來我が實業界は随分苦戦し來たのであります。我が國昨年中の貿易は十一月までに二十三億に上つて居ります。内輸出が十五億、輸入が七億餘といふやうに記憶して居ります。輸出超過は六億以上でそれだけ正貨が日本に入つたわけでありまして、而もそれは貿易品のみから見た計算であります。此の外個人の事業に於ても夥しい利益が日本に落ちて居るといふことは、例へば船舶の所持者などがこの歐洲戰爭の影響から、日頃よりも二十倍三十倍の利益を上げて居るといふこと

も事實であります。これ等の利益を合すれば日本の實業界は未だ嘗てない盛況を示して居るのであります。その利益金は如何なる事に使用されて居るかといふと、それは將來日本が世界を相手にして活動せんとする目的の爲に創設經營されつつある事業などの基金に使用されて居るのであります。これ等の爲に新事業に投資した金額は既に五億餘にも達し、その内昨年未だに拂ひ込んだ金額は二億五千萬圓に及んで居るといふことであります。畢竟これ等は日本が將來の經濟戰に供ふる所のものであつて、實業界が此の態度を以て進みつゝあるといふことは日本國民たるものゝ意を強うすることでありませぬ。

さてこの發展と共に缺くべからざるものは學術の根本的研究であります。ところが從來我が國に於て使用し來つた科學工業の根本たるべき材料は何れも外國から輸入されるのを待つて居つた有様でありましたが、今度の戰爭に依つてそれ等の道が杜絶され一時は非常に困つたのであります。それが却つて日本國民の奮起を促し必要に迫られて、今迄は外國でなければ出來ないと斷念して居つたものが、最近になつて日本に於て作り出されるやうになつたものが澤山あります。

國民の健康に關する醫學の如きも今迄は凡て全く外國の書物にのみ頼つて居たのが、今度の事變から促されて大いに學問の

獨立の必要を自覺して來ました。

此に於て、私學に醫科大學の設立が計畫され、民間に科學研究所が設けらるゝといふことは吾が國の精神的自覺と見ねばなりません。

纏つて思想界の方はどうであるかと見ると、所謂社會の耳目と云はるゝ新聞雜誌に現れて來る論說などの傾向を見て、從來は唯過去の繰返しや勘定に止まつて居たかの如きものも、今日の態度は全く將來の國家、戦後の世界に對する政策乃至教育といふやうなことに考察を廻らして居るやうになつたのは、實に國民の思想上に於ける根本的の變化であるといはねばなりません。又今日の進歩した科學より割り出したる豫想及び神祕的直觀的に看破したる豫言といふやうなことも、嘗ては日本に見なかつたことでありますが、最近はいさういふ方面も日本人の間に於て唱道されるようになった傾向があります。

近き例を挙げると、數學、天文に堪能なる隈本教授は日本の將來に就いて種々の豫言をして居るが、その中に次のやうなことがある。即ち『今度の歐洲戰爭に就いて平和會議の開かれるのは、大正六年八、九月頃である。併し十四年先きには再び世界に大戰亂が起り、其の時日本が獨逸を懲らしてその軍國主義に止めを刺して初めて世界の平和が得られる』と。兎も角も

かゝる事を發表する人があるといふことは國民として國家の將來を思ふ故であつて、國民の思想が一身一家のことより擴大して國家的自覺に活き、世界的思想に觸れて來たものであるといふことが出來ると思ひます。この時に際して國民の半數を占めて居る所の婦人界はどうであるかといふと、其所にも非常に希望を見出すのであります。

從來の日本婦人は、とかく社會からも認められず、又婦人自身も消極的、個人的に傾き勝ちであつたのであります。今は國家も婦人の力を俟ち、婦人自身も亦自ら醒めてこの好機運に乗じて一發展を來さうとするかの如き勇氣が表れて來たのであります。兎も角も國家が今獨立自覺の態度に向つて居る時、婦人だからと言つてその國家の發展進歩に不關焉では居られないのであります。日本婦人が今度の戰爭によつて如何なる影響を受けて居るかといふことは日本國民ばかりでなく、諸外國に於ても餘程の注意を拂つて居るのであります。昨年、倫敦タイムズはその意味の問題を提出して、余の意見を求めたのであります。米國に於てイブニングポストも同様の意味を以て意見を徴したのであります。斯くの如く戰爭が及ばした日本國民の影響といふことは、世界に於て頻りに論ぜられて居るのであります。我が國の婦人、將來この國の母たるべき婦人が、此の際

如何なる覺悟を以て立たなければならぬか、今年如何なる決心を以て努力しなければならぬかといふことは、最早論ずる迄も無い事であります。

日本の婦人は從來國民的自覺といふことに缺けて居たと私は思ふのであります。それは一身一家を預つて行く迄は出来ても、今一步團體的精神に融合するといふこと、團體的活動に加はるといふことがどうしても婦人の間に成立し難かつたのであります。併し今はもうさういふ事を言つて不徹底に終つて居るべき時ではないのであります。即ち内に醒めては自分の天職を發揮し、外には時代の要求に適應して、この國家この社會を創造して行くところの勇氣と努力を持たねばなりません。婦人にこの精神が出来なければ國家はどうしても進むことは出来ません、即ち國家の進歩は國民の覺醒に俟つものであります、その國民の半數を占めて居る婦人が依然として眠つて居つては、國家は完全なる進歩を遂げよう筈はないのであります。

大正六年といふ事が明治維新以來恰も五十年に相當し、わが女子大學が創立十六年に當るといふことがお芽出度いといふのは此の時最早從來に卓越したる一進歩のある時であるから、殊に芽出度い意義があるといふのであります。さうして是等一個人或は婦人界の一社會が進歩發展するといふことはやがて國家

の發展であり、社會の進歩であるのであります。私共はこの意味を以て新年を祝さなければなりません。

〔「家庭週報」第三百九十九號〕 大正六年一月

獨創的精神の養成方案

一

近時斯界の問題となつた、獨創的精神の養成は、何と云つても、今日の教育制度を更新しない限り、到底出来ない相談である。思ふに今日の教育制度は、何から何までキチンと劃一されて、小學校から大學に至るまで、一樣に試験學問が強ひられてをる。それが爲如何に教育者が生徒に自働的習慣を與へやうとしても、獨創的精神を養成しやうとしても、これを實際に行ふことが出来ないのである。換言すれば、被教育者の獨創的精神を涵養せんがために、今日の我が教育界は餘りに、縛られ過ぎてをるのである。これを試みるが爲の餘裕も無ければ、自由も無いのである。又、一方學生生徒の側になつて考へて見ると、これ亦當てがはれた學科が多く、それらを全部取るゝことすら隙が無い位で、到底自由に物を選択したり、これに就て自由

討究を試みるやうな時間が無い。而も此の傾向は、上に進めば進む程寛かたで無ければならぬ筈であるのに、實際は全く其の反對である。中學校の如きは、明かに高等普通の教育所たるを規定されてをるにも拘らず、事實は殆ど高等諸學校の入學準備所に過ぎない。隨て教員もこれら高等諸學校入學試験を一人でも多くパスせしめんことにのみ全力を注いで、大切な人格的教養の方面などは、スツカリ御留守になつてをる。而して一も二も無く點數主義な教育が全國を風靡して居る。故に學生の理想亦自分自身の人格の中に求めずして、或は成績優等に求め、或は恩賜銀時計にのみ求めてをる。併しこれも止むを得ないことである。

斯様な譯で、今日の教育制度が、被教育者の眞能力並に獨創的心力を障害し妨碍してをることは實に大したものである。中でも獨創力の養成上有害極まるものは試験である。熟ら思ふに、今日の試験制度なるものは、學生生徒の獨創力を養成する上に、どれ位害毒を流してをるか分らぬ。彼等は此の試験の結果たる成績の爲に將來の運命が殆ど規制されてをるのであるから、厭でも應でもこれに没頭してノートと首ツ引きをしなければならぬ。上から詰込まれた知識を用不用に拘らず暗記せねばならぬ。かくて茲に無理が出来て、或は健康を害し、或は精

神を害ふに至るのである。加之此の種の機械的勉強は、徹頭徹尾受働と保留とにのみ止まつてをるから、自分自身の尊い創造的内容を積極的に伸張し實現せんことなどは思ひも寄らぬことである。斯くて、此の試験なるものは、學生生徒を精神的自殺に陥らしめるものである。小學校教育の時代から、三十面をかいた大學教育の時代まで、斯様な教育を施されて、個性の豊富な創造性のタツブリした人格がどうして造りあげられやう。日本文化の平凡で、何等諸外國に向つて誇るものなく、何時までも歐米學界の後塵を拜してゐなければならぬのも、誠に故あること、曰はなければならぬ。

二

然らば、獨創的精神を養はんには、第一どうすればよいかと云ふに、先づ今日の教育制度を根本的に改善することが必要である。私は夙に此のことを考へて來た者であるが、今や全く其の通りになつた觀がある。私は、教育は根本的に改めなければ駄目だと云ふ見地から、それには先づ世の父母を改新することから、始めねばならぬと考へ、中にも新時代の母を造ることが、國家百年の大計上最も急務と考へ、今日の女子大學校に全力を傾注することゝしたのである。而して、其の目的は、女子

の人格を造ることに置き、早くから獨創的能力の養成に注意し、學校寄宿舎に於ける生活の如きも、自治組織となし、自立自動的にこれを指導して來たのである。又學問は成るべくこれを日常生活に應用することを心掛け、斯かる習慣を造らんことに努めた程に、三四年此の方は漸く校風が出来たやうである。然るに茲に困るのは、折角此のやうな校風が出来上つたにも拘らず、眞に獨創力を養はんが爲の教育を行ふには、どうも制度がまだ不完全である。何しろ、毎週の教授時間が、三十時間以上もあることだから、思ふやうに精神修養の時間なり、自由討究の時間なりを生徒に與へることが出来ない。朝も色々と冥想をやらしたりしてをるがどうも學科の方の時間に迫はれて思ふやうにいかない。そこで今度は、來年度から斯かる制度を更へて、時間の如きも最少限度を十九時間（從來の三分の二）にまで減じ、そして教師は成るべくこれに干渉をせず、唯ホンの指導する位な所に止め、生徒をして自分自身で、研究せしめやうと企て、それが教授會を愈々通過したのである。尤も學科の如きも、今日見るやうな小専門學科對立主義では、學科相互の間に統一が無く雜駁で、隨て學生生徒の眞の血肉とならぬから、此の精神的不消化病を豫め防ぎ且つ救ふ爲に、グループシステム（部門選擇制度）を試むることとしたのである。グループシ

ステムと云ふのは、教科間の自然關係を辿つて、部門を作り、學生生徒各自の傾向や、其の内心の要求に應じて、學科的選擇を許し、これに由て教育方面と被教育方面との調和を保ち、本當の人格的教育を爲さんとする企圖である。故に來學年度からはこれら制度の改革に依て、從來の自治主義獨創力養成主義が益々徹底して、從來に増してよりよい成績を見ることが出来ること、楽しんでゐる。

三

此の外もう一つ自發的精神の發達を阻害してゐるものがある。それは今日の教育が著しく生徒をおびやかすことである。就中其の尤なるものは「落第」である。

由來此の落第なるものは試験制度の附屬物で、試験のある所には必ず無ければならぬものとして、吾が國の教育社會にも取入れられてをるが、併し眞の人格教育、換言せば獨創精神の養成上から見て、試験が甚だ不當有害なものだとするなれば、其產物たる落第も不當有害なものでなければならぬのである。而も、此の落第者は、皆無價値なものばかりかと云へば、決してさうでは無く、就中高等學校入學試験の如きは、見るに忍びざる程の慘害を流してをる。思ふに、毎年天下萬千の青年學生

が、これに依て命も縮まんばかりの苦みを嘗めてをることである。或はそれが爲に心身の健康を害し、甚しきは死地にすら其の身を投ずるものもある。就中女子の如きはこれを恐るゝこと一通りや二通りではない。結局教育的に有害無益である。こんな制度が設けて無く共、幾らも教育が出来るのである。

私の學校では、此弊害を防がなが爲に、試験を止め落第を全廢してをる。然らば如何にして卒業を定めるかと云へば、大體の年限を定めて、各人の實力と人格の備はる標準を立て、それに達すれば卒業と云ふことにするのである。故に何年かゝらねば卒業出来ぬとか、總ての學科に合格せねば卒業が出来ぬとか云ふやうなことは無い。心身の具合や家庭の狀況等に依り、年限を長くすることも短くすることも出来るのである。併しながらこれが爲に決して生徒が怠けるとか、實力が附かぬとか云ふやうなこともない。なぜかと云へば、私の學校は前にも述べた通り、獨立自治の念並に習慣がもう或る程度まで出来上つてをるからである。加之、既にグループシステムを行ふ學校は、此の點から考へても、一定の年限を規定して劃一的に教育するやうなことは、不合理なことである。要するに學校は斯様な風にして始めて學生生徒を自立自營に導き、獨創的な潑刺たる精神を養ふことが出来ることゝなるのである。彼の大學なども、こ

んな風に改善されなければ、永久に獨創力の豊かな青年などの出やう筈は無い。況や教授の講義其のまゝを鵜呑にして、其の通りに書かねば落第させるとか、異説を信じたが爲めに蹴落されたとか云ふやうなことは、學問の研究も何もあつたものではない。況や自由討究だの、獨創的な試みなどのあり得やう筈は無いのである。これらの思想から見れば、私の學校の計畫なり實行なりの如きは、甚だしく大膽極つたものであるかも知れぬ。

四

以上は主として教育制度の改善を唱へたのであるが、眞に獨創的精神を涵養せん爲には、これだけでは足りない、何となれば、これは單に獨創的精神養成の外部的方面であつて、他にまだ内部的の一面の存するものがあるからである。私の學校では、これに關して、其の根本を養ふ爲に、廣義の宗教々育を施してをる。換言せば純眞なる宗教的信念を養はんことに努めてをる。但し茲に所謂宗教々育は、單なる何々宗教、乃至は宗教的教養などを教授するの意では無い、純粹なる精神生活の陶冶を稱するのである。而して此の宗教的信念は、自立自治自發的精神の發展上、大なる裨益をなすものである。何となれば、此

の信念は、一切生活の中心を爲すもので、諸學問の如きも、これに由て統一せられ、確固不拔のものとなり、隨てこれを陶冶することは、間接に獨創的精神の養成に大いに影響するものがあるからである。

纏て、其の方法に關しては、歸一教會で宣言し、私も其の節演説してこれを述べたやうに、要するに各自の本質を發見せしめ、其處に精神的物質的生活の基調を握へ、土臺を固めて、一々行動をして茲に據らしむることである。勿論此の場合教師も絶えず創造的向上的生活をなして、彼等被教育者をして、これに自然と感激せしめ、引き附くる要がある。又、彼等の精神發動に對しては、常に敬虔なる態度を持して、有害無益なる干渉、有難迷惑な親切等を加へず、よく赴かん所に從つて、これを善にまで指導すべきである。

獨創的精神の養成方案としては、尙他に數々あることであらうが、要するに其の根本は、外的には教育制度の改善と、内的には純眞な信念の養成との二つに存するやうに思はれる。而して教育制度の改善としては、劃一的組織を打破し、もつとく大なる自由を教育界に與へ、試験や落第等はこれを廢し、又學科や修業年限の如きはこれを統一して、無駄を省き其の教授法の如きも學生生徒の人格を中心として、自動的に研究し活動せ

しむるやう、これを指導することである。

〔内外教育評論〕第十一卷第十三號 大正六年一月

光榮の日

本日は大學部第十四回、高等女學校第十六回、豊明小學校第六回の卒業式でありまして、それに加へて御大典記念櫻楓家政館落成披露式を舉行する事の出來ます事を私は非常に喜ばしく思ふのであります。

此の兩者は今年は離るべからざる關係を持ち、且時の無いためこれを一つにして舉行いたしますが、併し此の内何れが副であり何れが主であるといふ差別はないのであります。今年の此の各部の卒業式及び地方から態々上京された會員によつて開かる、櫻楓會總會は母校にとつて實に未曾有の事であります。此の光榮に浴した吾々は恵みの露の滴りをうけて人となり、團體の生命を茲に發揮して今日の榮えある卒業式となつた次第であります。卒業生にとりましてこれ以上の光榮、これ以上の感化、これ以上の深い印象はない事と思はれます。

修養上の経験を朗讀す

小學校は無邪氣に畏くも五年間の経験を御仁慈深き皇后陛下の御聞きに達するの光榮を擔ひ高等女學校は過去五年間に積んだ最も深刻なる経験を謹んで御前に朗讀いたしまして各自の心に深く決する所があつたのであります。又大學部は修養上の経験を申し上げるに就きまして、餘り懼れ多く、日頃の生活の儘を表すことが甚だ困難でありましたため、寧ろ無邪氣に書きました今學年の最後の試験に出した答案『教育と信念に就いての我が覺悟』といふ中から一つを選びまして、少しく言葉に修正を加へ、更に他の組より其の朗讀者を選定しまして、御前に朗讀をいたしたので御座います。これに就いて卒業生全體及び櫻楓會員に御知らせをして置く必要があらうと思ひますのは、此の多くの答案から銓衡するに就きましては、七名の教授及び三年生の指導者四名を選びまして、此の十一名の委員によつて朗讀者も共に定めました事であります。而して我が覺悟といふ處に於て卒業生諸子はその使命を深く感ずる所あつて、茲に神明に誓ふ處があつたのであります。櫻楓會員諸子は殊に光輝燦然たる玉座のもとに熱誠を捧げ、内に深く櫻楓會の使命を省み、將來のために神明に誓ふ所があつたのであります。

畏き御佳賞の御言葉

當日は殊に千六百名の會員の内より一名の總代を選び、若葉會員は千幾百の中より一名の總代を選んで當日の拜謁の光榮に浴する事が出来たのであります。私は又御着葦直ちに拜謁を給はり、言上するの光榮を許されまして、本校並びに櫻楓會を代表し左の事を言上いたしました。

陛下御親臨の光榮に浴せる此の新館は本校卒業生の團體なる櫻楓會員千六百有餘名が去秋舉行させ給ひし御大典を記念し、兼て吾が國の將來に婦人の使命を果さんがために建設したるものにして、御大典記念櫻楓會家政館と名づけたるものなり。右恭しく言上す。

而して、陛下より校長へ袴地一反、御菓子一箱、學校へ金一千圓、教職員一同へ金一百圓及び御菓子、生徒一同へ金二百五十圓御下賜の忝き恩命に接したのであります。且非常に時間の少いにも關らず、諸子の至誠をこめて製作した成績品を残らず御覽になり、本校の五年間に進歩した成績を御佳賞になり、將來益々勉めよとの有難き御獎勵の御聖旨に接した次第であります。

校庭に漲る空氣

當日全校の校庭を震動せしめましたその高い波は尙今日我々の心裏に響いて、只今の喜ばしい卒業式並びに披露式の光榮となつて居るので御座います。私共は茲に神明に誓つて天眞の意を表せん事を希望するのであります。

なほ櫻楓會より記念館のために御集めになつた寄附金の結果建築の経過とは印刷に附して何れ後より御送りする筈であります。櫻楓會員其の御同情によつて集まつた金額は實に四萬五千二百四十五圓六錢でありまして、其の内譯を申し上げますと、一般寄附者(百一名)一萬七千四百三十八圓、補助團員(十九名)六千二百二十圓、櫻楓會員一萬八千七百一圓九十錢、若葉會員一千四十圓十錢、在校生徒(十七組)一千八百四十五圓六錢といふ事になります。而して新築の家政館は建築費に四萬五千圓、内部の設備に一萬五千圓合計六萬圓を費したのであります。會員外の同情者及び父兄諸氏には未だ御挨拶いたす機会もなかつたのであります。深い御同情を以て御盡し下すつた事、殊に櫻楓會員諸子は非常に多忙なる所を厭はず、且未だ經濟の餘裕がない六ヶ敷い所を喜んで御盡しになつた事は感謝に堪へぬ次第であります。

この校に養はれた美風

又學生にとりてはこの館の成立のために全體が非常に親密な共同の出来るやうになりました事は此一年間に著しく感ずる事の出来る美點で御座います。此の館に只今陳列いたしてありますものは、生徒及び櫻楓會員が全國に亘つて集めたものであります。此の参考館は一般の人々に見せる博物館と少しく趣きを異にして居ります。即ち學術研究家政研究の材料として集めたものでありますから、幾何か御不審の處もありませんがその御積りにて御覽戴き度いのであります。

〔家庭週報〕第四百十二號・第十四回卒業式
及び家政館新築披露式に於て) 大正六年四月

